

岐阜県博物館 調査研究報告

第 3 7 号

2016・2017
岐阜県博物館

岐阜県博物館調査研究報告

第 37 号

BULLETIN

OF

THE GIFU PREFECTURAL MUSEUM

No.37

岐 阜 県 博 物 館

GIFU PREFECTURAL MUSEUM

1989 Oyana, Seki City, Japan

March, 2017

目 次

調査研究実績	1-2
岐阜県関市小屋名におけるニホンカモシカの記録	3-4
佐野めぐみ・籠橋数浩・説田健一	
岐阜県博物館協会加盟館の閉館リストと収蔵物の移動について 文化財レスキューのための所在調査に関連して	5-12
南本有紀	
織豊期・西美濃高木氏の動向 ―「高木家文書」を中心として―	(1)–(12)
山田昭彦	
美濃（三野）国の郡（評）の初見について	(13)–(18)
近藤大典	

Contents

The results of the research..... 1-2

Record of the Japanese serow *Capricornis crispus* (Temminck) (Cetartiodactyla, Bovidae)
from Oyana, Seki, Gifu Prefecture, Japan
..... 3-4
Megumi Sano, Kazuhiro Kagohashi, Ken-ichi Setsuda

Creating the List and Overview of closed museums in Gifu Museum Association and
Fluctuation of their collections: A Step toward investigation for cultural properties rescue
..... 5-12
Yuki Minamimoto

Table of Contents Trend of the Takagi family lived in the western Mino province during the
Shokuho period –A Focus on Takagi-ke monjo (Takagi family documents)–
..... (1)–(12)
Akihiko Yamada

The First Appearances of the counties of Mino Province
..... (13)–(18)
Daisuke Kondo

調査研究実績

論文等

【自然分野】

- 船戸智, 2016, 薬草とわたしたちの暮らし –平成27年度岐阜県博物館秋季特別展より–. 日本共生科学会・論文集.
- 船戸智, 2016, パターン把握を通して環境リテラシーを高める現職教員研修プログラムの作成. 科学研究費・研究成果報告書, 23-24.
- Azuma, Y., Xu, X., Shibata, M., Kawabe, S., Miyata, K., Imai, T., 2016, A bizarre theropod from the Early Cretaceous of Japan highlighting mosaic evolution among coelurosaurians. *Scientific Reports* **6**, 20478.
- Kawabe, S., Matsuda, S., Tsunekawa, N., Endo, H., 2015, Ontogenetic shape change in the chicken brain: implications for paleontology. *PLOS ONE* **10** (6), e0129939.
- 河部壮一郎, 2015, 地球科学入門講座「CTを用いた化石研究～古神経学入門～」. 地球科学 **69** (4), 241–248.
- Matsui, K., Kawabe, S., 2015, The oldest record of *Paleoparadoxia* from the Northwest Pacific with an implication on the early evolution of Paleoparadoxiinae (Mammalia: Desmostylia). *Paleontological Research* **19** (3), 251–265.
- 河部壮一郎. 2015. 鳥類の脳形態を決定づける主な要因について. 化石研究会会誌 **47** (1), 2–10.
- 説田健一, 2016, 柳原要二が明治後期から昭和初期に収集した鳥類標本について. 生物学史研究 **94**, 45-48.
- 説田健一, 2016, 山階鳥類研究所の羽山鳥類コレクションから見つかった柳原要二との交換による鳥類標本. 山階鳥類学雑誌 **48**, 16-28.
- Hattori, S., 2016, Evolution of the hallux in non-avian theropod dinosaurs. *Journal of Vertebrate Paleontology* **36**(4), e1116995.
- 河部壮一郎・北山浩生・服部創紀, 2016, 型取りによる透明恐竜頭骨模型の開発. 福井県立恐竜博物館紀要 **15**, 85–92.

【人文分野】

- 守屋靖裕, 2015, 常楽寺蔵 木造宝冠釈迦如来坐象. 國華 **121**(1), 61-64, 25.
- 南本有紀, 2017(刊行予定), 「寒水の掛踊」の記録作成と調査研究事業報告書. 郡上市伝統文化活性化実行委員会(事務局：郡上市教育委員会社会教育課). ※分担執筆
- 山田昭彦, 2017, 特別展を核とする、県内各地での関連展示の展開について. 博物館研究 **52**(1), 29-31.

学会発表等

【自然分野】

- 説田健一, 2015, 岐阜県内の高等学校と大学に保管されていた戦前の鳥類の本剥製について. 日本鳥学会2015年度大会.

- ・ 説田健一, 2015, 柳原要二が明治後期から昭和初期に収集した鳥類標本について. 2015年度生物学史分科会「夏の学校」.
- ・ 説田健一, 2015, 調査グループ名: 岐阜県博物館, サイト名: 岐阜県百年公園. 里やま市民活動交流会 in 三重.
- ・ Shibata, M., Kawabe, S., Jintasakul, P., Azuma, Y., 2015, Preliminary Report of the Endocranial Anatomy of Thailand Iguanodontian. The 2nd International Symposium on Asian Dinosaurs, Bangkok.
- ・ Matsui, K., Kawabe, S., Endo, H., Kobayashi, S., Tsuihiji, T., 2015. Quantitative analysis of aquatic adaption in olfactory and optic characters in the skull of Carnivora. Society of Vertebrate Paleontology 75th Annual Meeting, Dallas.
- ・ 河部壮一郎, 2016, 秩父盆地中新統産カツオドリの神経解剖学. 日本古生物学会第165回例会.
- ・ 柴田正輝・河部壮一郎・プラトウエン ジンタサクル・東 洋一・宮田和周, 2016, イグアナドン類の脳の復元. 日本古生物学会第165回例会.
- ・ 小池翔子・河部壮一郎・佐藤正明・岡本 隆, 2015, 3Dプリンタを用いた異常巻きアンモナイト理論形態の実体化. 第15回日本地質学会四国支部総会・講演会.
- ・ Hattori, S., 2016, Homologies of pedal muscles between avian and non-avian reptiles as a basis for their reconstruction in fossil archosaurs. Society of Vertebrate Paleontology 76th Annual Meeting, Utah.
- ・ 服部創紀・對比地孝亘, 2017, 獣脚類 *Herrerasaurus ischigualastensis* の足部筋肉系の復元, 日本古生物学会第166回例会, 東京.
- ・ 服部創紀, 2016, 化石主竜類における足部筋の進化史解明に向けた 現生爬虫類における足部筋の相同関係の解明, 日本古生物学会2016年年会, 福井.
- ・ 河部壮一郎・北山浩生・服部創紀, 2016, 魅せる恐竜の脳 ～型取りによる透明模型の開発～, 日本古生物学会2016年年会, 福井.
- ・ 説田健一・中尾喜代美, 2016, 石河熙香が比律賓ダバオで採集した鱈の剥製について, 2016年度生物学史分科会「夏の学校」, 奈良.
- ・ 説田健一, 2016, 柳原要二が大正14年(1925)から昭和3年(1928)に購入した折居彪二郎の剥製について, 日本鳥学会2016年度大会, 札幌.
- ・ 須山知香・可児美紀・田中俊弘・高橋 弘, 2017, 地域植物誌に欠かせない地域植物標本庫の存続戦略, 日本植物分類学会第16回大会, 京都.
- ・ 井上好章・可児美紀, 2016, 5 mひもを使って、簡易ベルトトランセクト法を取り入れた植物観察「長良川の上流、中流、下流の植物観察」を例として, 日本理科教育学会第62回東海支部大会, 名古屋.

【人文分野】

- ・ 山田昭彦, 2016, 中近世の木曾川をめぐる問題—美濃・尾張の国境と治水. 第23回名古屋地理学会・岐阜地理学会合同シンポジウム, 名古屋.

岐阜県関市小屋名におけるニホンカモシカの記録

Record of the Japanese serow *Capricornis crispus* (Temminck) (Cetartiodactyla, Bovidae)
from Oyana, Seki, Gifu Prefecture, Japan

佐野めぐみ¹・籠橋数浩¹・説田健一²

Megumi Sano¹, Kazuhiro Kagohashi¹, Ken-ichi Setsuda²

¹岐阜県博物館サポーター（岐阜北高等学校所属）；²岐阜県博物館

要旨

岐阜県関市小屋名の百年公園に赤外線センサーカメラを設置し、初めてニホンカモシカ *Capricornis crispus* (Temminck) を撮影した。

はじめに

岐阜県博物館では、2003年から赤外線センサーカメラを使って岐阜県百年公園内の哺乳類相の調査をしてきた（説田，2004）。2008年からは、環境省のモニタリングサイト1000里地調査に参加し、これまでに13種の中・大型哺乳類が確認された（岐阜県博物館，2014）。

今回、初めてニホンカモシカ *Capricornis crispus* (Temminck) を撮影したので、ここに報告する。

調査地および調査方法

岐阜県博物館では、モニタリングサイト1000里地調査（以下、モニ1000とする）の中・大型哺乳類調査として、岐阜県百年公園北部の3地点（図1）に赤外線センサー付き自動撮影カメラ（FieldNoteDUO，麻里布商事，山口）を1台ずつ設置し、撮影を行ってきた。調査マニュアルでは、調査期間は全国的な比較が可能な5月から10月頃までで、カメラを約1ヶ月間設置し、回収後にデータ取り出し電池を交換し、それを繰り返すとなっている（日本自然保護協会，2008）。今年度の調査では、2016年5月5日から6月26日，7月10日から8月28日，9月11日から10月30日に設置した。

今回、その設置期間以外にも別の動画撮影カメラ（Ltl-Acorn6310W MARIFセレクション/ノングロー940nmタイプ 輸入代理店 麻里府商事）を、同じ3地点に6月26日から7月10日，10月30日から2017年1月21日まで設置し、継続して撮影を行った。3台ずつ合計6台用いて、撮影期間を空けないようにした。12月10日と12月24日にカメラの交換を行った。なお、カメラの回収日以前にバッテリーが切れてカメラが止まったことがあった。撮影モードは、1回の撮影時間を60秒、

インターバルは15秒に設定した。地上から1.2m～1.5mの高さで獣道の脇にある木の幹にベルトで括り付けて固定した。その時、獣道の進行方向に対して直角になるようにした。日溜まりの少ない場所を選んだ。動画は1回の撮影を1枚として数えた。

3地点の景観の概要と周辺の状況について記す。地点Dは遊歩道の見晴台から北西にのびる尾根上の中地点で踏み跡があり、南方の谷から狭い獣道が合流している、ヒノキ人工林内にある。地点Fは遊歩道からアカマツ林内に10mほど入ったところで、踏み跡がある。地点Gは遊歩道からヒノキ人工林を南に下った所で、百年公園の自由広場につながる谷筋の中間になる。

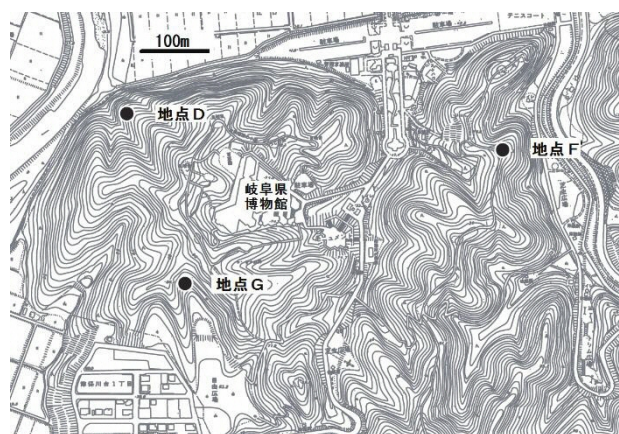


図1 赤外線センサーカメラ設置地点

結果

カメラが作動した期間は、モニ1000では389カメラ日（カメラの作動日数合計），動画撮影では271カメラ日になった。撮影総枚数は両方の結果を合わせて836枚，撮影された中・大型哺乳類は11種類，281枚だった。地点別では、地点Dは121枚，地点Fは44枚，

地点Gは116枚だった。

その中で、ニホンカモシカは2016年12月12日10時55分、地点Gで1頭、撮影された。画面右手前から左奥に向かってゆっくり、たびたび立ち止まりながら歩行していた(図2)。ほぼ東へ移動した(図3)。



図2 2016年12月12日に関市小屋名百年公園で撮影されたニホンカモシカ。佐野めぐみ撮影。

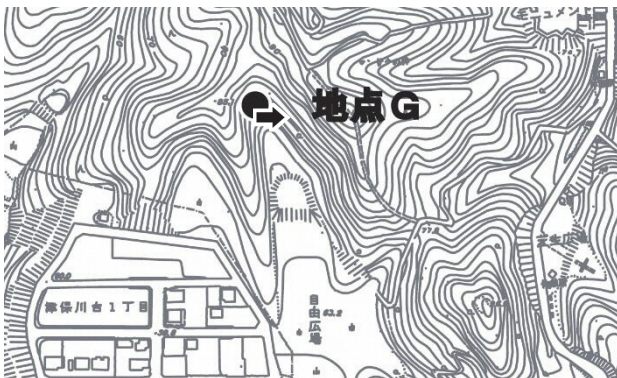


図3 ニホンカモシカが歩いた軌跡(→)。

考察

ニホンカモシカが百年公園で初めて撮影された背景として、岐阜県におけるニホンカモシカの生息分布が、年々、拡大していることがあげられる。2010年に可児郡御高町の市街地にあるショッピングセンター駐車場でカモシカが保護される事例が発生し、2011年時点で百年公園に近い岐阜市東部でニホンカモシカが確認されていた(岐阜県, 2015)。また、岐阜市雛倉地区で目撃、撮影され(岐阜新聞, 2010)、雛倉地区から石谷地区にかけて自動カメラで撮影された(岐阜市, 2014)。このように、美濃地方の平野部もしくは都市近郊にも拡大している事がわかる。

今回、関市百年公園でも撮影されたことから、生息分布の拡大が示唆された。

文献

- 岐阜県, 2015, 第二種特定鳥獣管理計画(カモシカ) 第1期, 26p.
- 岐阜県博物館, 2014, 特別展「里山いま昔-人と自然 あらたな“絆”を求めて-」図録, 64p.
- 岐阜市, 2014, 岐阜市の自然情報~岐阜市自然環境基礎調査~, 238p.
- 岐阜新聞, 2010, ニホンカモシカ岐阜市で撮影 市環境調査員 梶浦さん成功, 2010年3月19日, 朝刊.
- 日本自然保護協会, 2008, モニ1000里地調査 中・大型哺乳類調査マニュアルVer.3.0. <<https://www.nacsj.or.jp/project/moni1000/howto.html>> (2016年5月5日)
- 説田健一, 2004, 赤外線センサーカメラで撮影された関市岐阜県百年公園の哺乳類. 岐阜県博物館調査研究報告25, 13-26.

岐阜県博物館協会加盟館の閉館リストと収蔵物の移動について 文化財レスキューのための所在調査に関連して

Creating the List and Overview of closed museums in Gifu Museum Association and
Fluctuation of their collections: A Step toward investigation for cultural properties rescue

南本有紀¹

Yuki Minamimoto¹

¹岐阜県博物館

要旨

岐阜県博物館協会が刊行した名簿から館園をリストアップし、閉館した施設を抽出、その後の館蔵資料の推移を調査してまとめた一覧表を作成した。

過去の加盟館リストによれば、当県では自然系私立館が、1970年代前半、草創期の県博物館業界を率先し、県博物館協会でも私立館や個人会員の活躍が見られたこと、その後、70年代後半～2000年代前半までの公立館優勢を経て、平成20年代以降の博物館冬の時代に、多くの私立館が閉館したことが判明した。これらの閉館施設の所蔵品のうち、学術的に価値のある優れたコレクションは県内外の博物館・研究機関へ引き継がれている。

以上の県内所在文化財移動の把握は、未指定文化財の所在調査と同様、今後、博物館・文化行政の危機管理の一環として情報収集・集積されることが望ましい。

はじめに

2016年は岐阜県博物館協会創立50周年、かつ、岐阜県博物館開館40周年のメモリアルイヤーであった。逆算すると、今から40～50年前の1970～80年代、博物館設立ラッシュの時代に岐阜県博物館も開館（1976）し、かつ、県内でも多くの博物館が誕生し、組織化されたのである。当時の証言に、「わが国では、ここ数年、毎年50館前後の博物館、美術館、資料館（中略）が建設されている。たとえば、昭和52年度に50館、昭和53年度に47館が開館している」¹とある。この時期は、明治100年（1968）、置県100年（岐阜県の場合、1972）を機縁に地方公立博物館の建設が相次ぐ時代であった。続く80年代後半から90年代初めのバブル経済期とその後しばらくは、公立館に加え、多くの私立・企業博物館が陸続と誕生した²。岐阜県では、前述の県博物館以降、県美術館（1982～）、高山陣屋（～1969県事務所として使用、1996復元）、県先端科学技術体験センター（サイエンスワールド、1999～）、飛騨・世界生活文化センター（飛騨センター、2001～）、県現代陶芸美術館（2002～）、県世界淡水魚園水族館（アクア・トトぎふ、2004～）が開館している。

翻って、2000年代以降、とくに平成20年代の博物館は冬の時代といわれて久しい。ちょうど10年前（2008）には、日本博物館協会の調査によると増え続けてきた博物館数が戦後初めて減少したと報道されて

いる³。文部科学省の社会教育調査⁴によれば、昭和62年（1987）以来、増加の一途だった博物館（登録博物館・博物館相当施設・博物館類似施設）数が、平成23年度に減少に転じ（5,747館で前年より28館減）、27年度の中間報告ではさらに減少している（5,683館で64館減）。入館者数も、全体では増え続けているものの、それを上回る勢いの館数増加が相殺して、1館あたりの入館者数は昭和61年（1986）以来ずっと減り続けている。全体として、現在の博物館業界は停滞もしくは減退の気運に包まれているといえるだろう。野放図な増設とマーケティング（利用者研究・評価）の不備に加えて社会情勢（不景気、少子高齢化）など内外の要因が想起されるが、こうした情勢下、岐阜県では、行財政改革の結果、県ミュージアムひだ（飛騨センター内博物館のみを2006県教委に移管）が閉館（2011）⁵、サイエンスワールド（2006～）、アクア・トトぎふ（2004開館より）⁶で指定管理者制度が導入された。

さて、50周年を迎えた岐阜県博物館協会には2017年1月現在122館園が加盟しているが、数年前の2015年度は127館であった。わずか数年で着実に減少している。最近では、2017年1月に1館（3月現在、不定期で開館）、2016年1月にも1館が閉館のため退会している。当該施設は両館とも私立館で、廃止理由は、館主の高齢化と寒冷地でのコレクション保管の困難さなど「多数ある」由であった。加盟館以外でも2000年に入ってから

活動を休止する館⁷が目につくようになってきた。今回、50周年を機に立ち上げられた県博協プロジェクト⁸のひとつに加わり、この半世紀に多くの館園が協会に参加し、そして、脱退（もしくは消息不明）していったようすを知ることができた。当県の博物館事情をまとめることで、文化財の置かれた状況の一端をうかがえればと思い、その概要を以下に記す。

1 岐阜県内の博物館の特徴

はじめに、岐阜県内の博物館の概況についてまとめておこう。表1⁹で、現在の県内博物館の種類別の割合（平成26年度）を示した。

表1-1 岐阜県内の博物館（種類別）

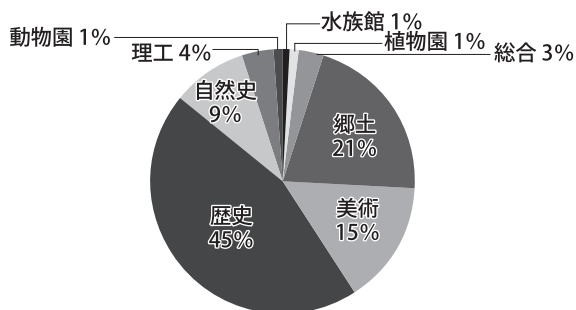
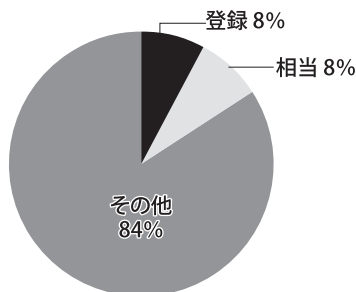
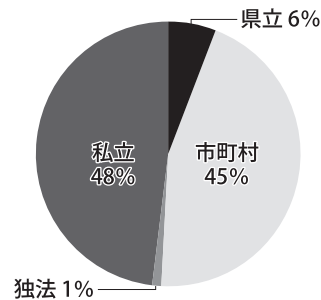


表1-2 岐阜県内の博物館（博物館法区分別）



日本博物館協会のアンケート調査（平成25年度）によれば、全国の館園のうち館種別割合（%），総合4.8，郷土12.6，美術20.9，歴史46.4，自然史4.1，理工4.6，動物園1.9，水族館2.3，植物園1.8，動水植0.5¹⁰と比べて、県内では歴史系は全国並み、美術系が少なく、郷土系・自然史系が多くなっている。注目されるのは登録博物館（全国平均27.7）・相当施設（10.4）の割合が少なく、8割以上がその他（類似施設）であることだ。この調査では都道府県毎の設置者別数が示されていないため断言できないが、その多くが私立館であると想定される。というのも、自然系の個人博物館が多いことが当県の特徴といえるからだ。県博協の現加盟館（表2）¹¹では、約半数が私立館である（全国平均は22.4）。

表2 岐阜県博物館協会加盟館（設置者別）



先に紹介した報道記事¹²では博物館冬の時代の要因について主に公立館を取上げて考察し、施設の乱立と平成の大合併による類似館の重複を指摘、加えて、博物館整備を後押しした国の施策¹³を「建設優先 理念後回し」と難じている。経営感覚の欠如など、指摘はいちいちごもっともで公立館に勤務する当事者のひとりとして反省させられる点も少なくないが、岐阜県の場合、博物館閉館の事情はやや異なると思われる。即ち、創立50年記念誌¹⁴によると、岐阜県内の博物館（県博協加盟館）は、私立館が公立館に率先して開館しており、その組織化を主導したのも私立館や個人会員であった。博物館を取り巻く社会環境は共有しつつも、自ずと、開館・閉館の理由も上記公立館とは異なってくるのだ。

次節で、岐阜県博物館協会の加盟館のうち閉館した施設のリストを示し、具体的に見ていこう。

2 閉館館リスト

過去の加盟館の閉館状況を整理しようと考えたのは、県博協個人会員の今井雅巳の提言に触発されたからだ。数十年前に県博協から刊行された名簿に掲載された館園のうち少なからぬ施設が閉館しており、その所蔵品の行方が気付きである、県博協で散逸が懸念される文化財群を追跡調査すべきではないかという意見であった。

阪神淡路大震災（1995）、新潟県中越地震（2004）、中越沖地震（2007）、東日本大震災（2011）、熊本地震（2016）と、災害発生の度に文化財レスキューの思想とハウツーが普及してきた。現在では、非常時（発災後）に対症療法的に対応するのではなく、文化財保護施策においても防災・減災を目指すべきだとされている。つまり、予想される災害への日頃の備えを重視する考え方である。文化財の防災についていえば、存在が周知され、対応が取られやすい指定文化財よりも、むしろ、未指定品の所在を把握することが急務になっている¹⁵。ここ数年、各地で文化財レスキューの体制づくりが散見¹⁶される一方、平時（発災前）における関係機関どうしの連携と文化財調査（所在現状把握）の重要性が見直され

てきたのである。活動の主体は「災害が起きた後」よりも「災害が来る前の保全活動」¹⁷にシフトしつつある。

とはいえ、勤務館での本務外に、地域に乗り込んで膨大雑多な文化財の悉皆調査¹⁸を始めるのは、正直、荷が重いというのが偽らざる気持ちである。県内閉館館の確認作業は、県内文化財の状況把握のための作業として、とりあえず何かを始めるきっかけとしてちょうどよいように思えた。そこで、これまでに刊行された県内館園名簿10種（文末の文献リスト中、*を付した）と現加盟館リストから延べ582館園をリストアップし、うち重複するものや、現在も活動が確認できたものを除き、閉館が疑われる73施設を抽出したのが、表3（10～11ページに掲載）である。

これらの73館園から、設置者を見ると、表4のごとくである。名簿からは設置者の別が判然としなかったが、不明分には多くの私立館が含まれると思われる。館種では、歴史・郷土系が約半数に留まり（前出の日博協調査では、全国平均 歴史46.4％、郷土12.6％）、自然系が全国的な傾向（同4.1％）に対して全体の1/4以上という高い比率を占めている。前述の県内博物館の特徴が反映された結果といえよう。

表4-1 全館園：設置者別

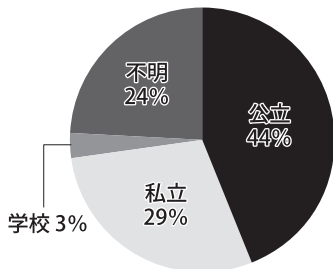
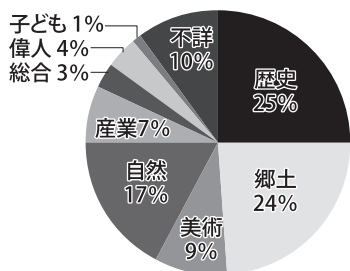


表4-2 全館園：館種別



さらに、表3から、名称の差異で重複が認められるもの、後継館による活動継承が想定されるものを除くと66施設の閉館がほぼ確認できた。これらの所在地を見ると、現加盟館（表5、岐阜県博物館協会HPより作成）と比べると、岐阜・飛騨地域に立地した館園がやや多く、自然系・私立館（不詳の多くが私立館と思われる）が目立つ結果となった（表6）。

表5 現加盟館の所在地

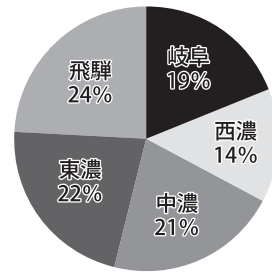


表6-1 閉館施設の所在地

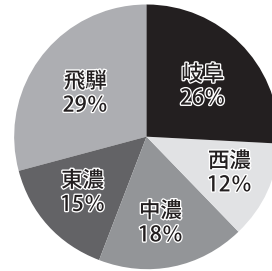


表6-2 閉館施設の館種

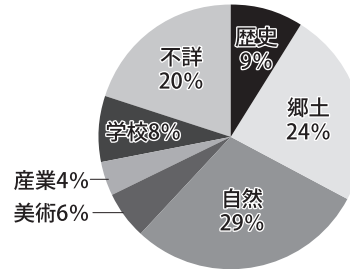
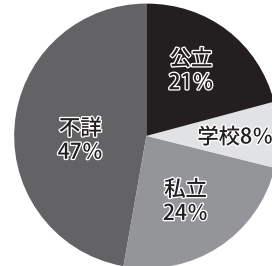


表6-3 閉館施設の設置者



以上のグラフと表3からうかがえる点をまとめると、岐阜県の博物館界では、草創期に多くの私立館が活躍し、とくに自然系の個人コレクションが積極的に公開されていたこと、歴史・郷土系私立館の多くは、恐らく観光施設¹⁹であったこと、前者の多くが岐阜地域に、後者の多くが飛騨地域に所在していたことが推測される。想像するに、これらの施設は、社会情勢の変化（博物館冬の時代）に加え、コレクターの世代交代等、個々の事情によって活動継続が困難に陥り、大半がひっそりと役割を終えたと思われる。それでも、学術的に価値の高いコレクションは、他館や研究施設に引き継がれている（表3「コレクション移管状況など」欄を参照）ことが一縷の希望といえよう。

おわりに

文化財レスキューや防災は、東日本大震災以降、博物館業界では現在ホットな話題のひとつである。前者は被災文化財の緊急避難や一時保管などの一次的な処理が一段落し、現在は、安定化処理や展覧会・シンポジウム²⁰など、二次的な局面に差し掛かっている。今後は、後者、即ち、平常時の活動（防災対策）に比重が移っていくだろう。社会的には「復興」や「啓発」に果たす博物館の役割も期待されている²¹。

当然ながら、博物館にも危機管理は必須である。近年相次ぐ災害や異常気象が、将来の被災を、現実味を帯びて想像させ、防災意識の高まりの中、館園のBCP（事業継続計画）の策定は待ったなしである²²。岐阜県博物館でも消防訓練を毎年実施している。筆者が見学できた中では、岐阜県美術館で、消灯した展示室内で負傷者を台車に乗せて救助するような実践的な訓練²³を実施して啓発された。神奈川県博物館協会の図上訓練²⁴では、第1フェーズ；地震・津波発生→対策組織立ち上げ、情報収集・把握、第2フェーズ；初期レスキュー実施と受援体制構築の二段階に分けて、ブロック幹事館と現地対策本部・総合対策本部が情報を集約・共有する実際的な訓練が行われていた。

岐阜県博物館協会でも、東日本以前の情報ながら防災対策をまとめた冊子²⁵を作成したほか、加盟館被災時に協会内で互助活動が実施できるように協会規約を一部改正（2016）し、将来の災害発生に備える体制づくりを進めていくべく検討されている。今後はそれぞれの立地や環境から想定される災害に合致した具体的な対策と訓練が必要だろう。海がない（津波被害がない）反面、日本有数の活断層を抱える海拔0～3000メートルの平野（水害）から山岳地帯（土砂災害）までの多様な県土の特性を考えると、独自メソッドの策定が急がれる。

ところで、「当該博物館の所在地又はその周辺にある文化財保護法の適用を受ける文化財」（博物館法第3条8項）をも保護対象に含める登録博物館はもちろん、文化行政を担う県教委では、（相当な困難が想定されるだろう）館藏品や指定文化財以外の膨大な未指定文化財にも目配りすべきだろう。その意味で、京都府が導入を試みている未指定文化財から「指定予備群」を選定し、修復費用を助成する制度²⁶は、未知の文化財の掘り起こしと保護という点で平時の防災施策と発想を同じくするものように思える。

今回のピックアップ作業は、確認・追跡調査が徹底せず、暫定的なリストに留まるが、地域に所在する文化財・文化財群の情報集積、さらには将来的な文化財レスキューにおける活動計画時にその所在情報を反映した防

災プラン策定の一助となれば幸いである。

謝意

本稿執筆に当たり、岐阜県博物館協会創立50周年記念事業企画委員会（可児光生会長）「たかめる部会」（正村美里部会長）の皆様をはじめ、多くの方にご指導賜りました。記して謝意を表します。文中では敬称を省略いたしました。なお、閉館リストを始め本稿に記載された内容の不備は、全て執筆者によるものです。

文献（*表で参照したもの）

- *岐阜県博物館. (1985). 岐阜県の博物館 美濃と飛騨の文化を訪ねて. 大衆書房.
- *岐阜県博物館協会. ([1989]). 岐阜県の博物館 美濃と飛騨の自然・文化を訪ねてガイドマップ. 岐阜県博物館協会.
- *岐阜県博物館協会. (1969). 岐阜県の博物館要覧. 岐阜県博物館協会.
- *岐阜県博物館協会. (1974). 岐阜県の博物館施設一覧表. 岐阜県博物館協会.
- *岐阜県博物館協会. (2007). 岐阜県の博物館・美術館129. 岐阜県博物館協会.
- *岐阜県文化財保護協会. (1987). 岐阜県の博物館 前編 濃飛の文化財. 岐阜県文化財保護協会.
- *宮崎惇. (1967年10月13日). 岐阜県の博物館. 岐阜日日新聞.
- *宮崎惇. (1969). 岐阜県の博物館および類似施設一覧表.
- *今井雅巳. (1988). 岐阜県の博物館120年の歩み 1 明治時代を中心に. 國學院大學博物館紀要 12, pp62-71.
- *小野木三郎. (1976). 岐阜県の博物館要覧 昭和50年版. 岐阜県博物館協会.
- 「震災から復興」指名担う公共施設／博物館や図書館郷土史として後世に. (2016年5月11日). 岐阜新聞, ページ: 22.
- 株式会社江の島マリンコーポレーション. (日付不明). 株式会社江の島マリンコーポレーション. 参照日: 2017年1月31日, 参照先: アクアトト・ぎふ: <http://www.enoshimamarine.com/aquatotto.html>
- 岐阜県博物館協会. (2016.3.15). 岐阜の博物館 178.
- 岐阜県博物館協会. (2016.9.15). 岐阜の博物館 179.
- 岐阜県博物館協会. (日付不明). 加盟館園情報（地区別一覧）. 参照日: 2017年1月25日, 参照先: 岐阜県博物館協会: <http://www.gifu-museum.jp/>

- member/list.html
- 岐阜県博物館協会中濃部会. ([2007]) . 博物館等の危機管理調査研究報告書. 岐阜県博物館協会.
- 原佳子. (2009) . 第2節 博物館の歴史. 著: 全国大学博物館学講座協議会西日本部会, 新しい博物館学 (第2刷) (ページ: p42) . 芙蓉書房出版.
- 佐藤泰. (2015) . 東日本大震災とミュージアム. 仙台・宮城ミュージアムアライアンス.
- 新井英夫・森八郎. (1980.6) . 新設博物館における生物学的問題. 家屋害虫 5・6.
- 神奈川県博物館協会. (2015.3) . 神奈川県博物館協会60周年記念事業 神奈川県博物館協会総合防災計画の策定に向けて. 神奈川県博物館協会会報 86.
- 西尾円. (2016) . 岐阜県の社会教育行政と博物館 明治から昭和・岐阜県博物館協会創立の時期まで. 著: 『岐阜県博物館協会創立50周年記念誌』編集委員会, 岐阜県博物館協会創立50周年記念誌 (ページ: pp17-25) . 岐阜県博物館協会.
- 西尾円. (2016) . 広瀬鎮と岐阜県博物館協会. 著: 『岐阜県博物館協会創立50周年記念誌』編集委員会, 岐阜県博物館協会創立50周年記念誌 (ページ: pp31-32) . 岐阜県博物館協会.
- 石田克. (2016) . 岐阜県博物館協会創立時の三役. 著: 『岐阜県博物館協会創立50周年記念誌』編集委員会, 岐阜県博物館協会創立50周年記念誌 (ページ: p30) . 岐阜県博物館協会.
- 千葉県博物館資料救済体系構築実行委員会. (2014年3月14日) . 千葉県博物館資料救済ネットワークの構築に向けて. 参照日: 2017年1月29日, 参照先: http://www.chiba-web.com/chibahaku/pdf/kyusai_01.pdf
- 村田眞宏. (2016.12) . 美術館における総合的なリスク管理へ. 博物館研究 51-12, pp4-5.
- 地域活性化センター. (2006) . 指定管理者制度導入事例集2006. 地域活性化センター.
- 津波により被災した文化財の保存修復技術の構築と専門機関の連携に関するプロジェクト実行委員会. (2016) . 大津波被災文化財保存修復技術連携プロジェクト支援企画展. 陸前高田市立博物館.
- 土山公仁. (2016) . 初期の岐阜県博物館協会. 著: 『岐阜県博物館協会創立50周年記念誌』編集委員会, 岐阜県博物館協会創立50周年記念誌 (ページ: pp26-29) . 岐阜県博物館協会.
- 内田俊秀. (2009.5) . 5. 動産文化財の防災. 自然災害科学 28-1, pp32-37.
- 日本博物館協会. (2016.4) . 平成26年度博物館園数. 博物館研究 51-4, pp14-15.
- 日本博物館協会. (2017.1) . 平成25年度博物館総合調査の結果から. 博物館研究 52-1, p6.
- 博物館 閉館の波/財政難 戦後初の減少. (2010年4月18日) . 朝日新聞, ページ: 1-2.
- 飛騨高山印籠美術館が閉館. (2006年4月13日) . 岐阜新聞, ページ: 23.
- 浜田拓志. (2015.7) . 「和歌山県博物館施設等災害対策連絡会議」設立の経過と課題. 博物館研究 50-7, pp10-13.
- 文化財に「指定予備群」, 地域の宝守れ 京都府が修復助成. (2017年1月3日) . 京都新聞.
- 文化財防災ネットワーク推進事業 中部・近畿文化財関係者による文化財防災連絡会議. (2016年12月13日) . 京都国立博物館平成知新館講堂.
- 文部科学省. (登録:平成21年以前) . 参照日: 2016年12月25日, 参照先: 社会教育調査 結果の概要: http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa02/shakai/kekka/1268528.htm
- 平川新. (2014) . 災害から歴史資料を守るため. 歴史研究 60, pp1-19.
- 平川新・佐藤大介・高橋修・奥村弘. (2014.10) . 資料保全から歴史研究へ. 歴史学研究 924, pp180-216.
- 揺れに強い構造知る手掛かりに 濃尾地震の建築被害紹介 名古屋で企画展. (2015年10月29日) . 中日新聞, ページ: 24.
- 和歌山県立博物館. (2015) . 先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝えるⅠ. 和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会.
- 和歌山県立博物館. (2016) . 先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝えるⅡ. 和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会.
- 訃報 五味輝一氏 (高山昭和館館長) . (2015年6月20日) . 岐阜新聞, ページ: 27.

注

- ¹ [新井英夫・森八郎, 1980.6]
- ² [原佳子, 2009]
- ³ [博物館 閉館の波/財政難 戦後初の減少, 2010]
- ⁴ [文部科学省, 登録:平成21年以前]
- ⁵ 現在, 指定管理者が運営している施設内に後継施設が開館している.
- ⁶ 岐阜県が設置し, 計画当初より江の島マリナー

レーションの業務委託が予定されていたが、地方自治法改正を受け、指定管理者制度で運営。〔地域活性化センター, 2006〕〔株式会社江の島マリンコーポレーション〕によると、岐阜県のPFI事業（Private Finance Initiative）として三菱商事を代表とする出資企業が有限会社ジー・エフ・エー（特別目的会社）を設立、県と30年間の事業契約を締結して管理運営している。

⁷ 飛騨高山印籠美術館（〔飛騨高山印籠美術館が閉館, 2006〕）など。高山昭和館は所蔵者の急逝（〔訃報 五味輝一氏（高山昭和館館長）, 2015〕）で閉鎖が危ぶまれたが、市外の企業が施設を買収して運営を継承している。

⁸ 本稿は岐阜県博物館協会創立50周年記念事業策定のために県博協に設置された同事業企画委員会「たかめる部会」の基礎資料として作成したリストを基に執筆した。当該事業は加盟館対象に事業案を募集するなどして、①「のこす」②「ひろめる」③「たかめる」の3部会が、それぞれ①記念誌編集、②広域広報、③連携企画展示とミュージアム（文化財）レスキューネットワーク構築の各事業を実施した。詳細は〔岐阜県博物館協会, 2016.3.15〕および〔岐阜県博物館協会, 2016.9.15〕を参照。

⁹ 〔日本博物館協会, 2016.4〕より作成した。

¹⁰ 〔日本博物館協会, 2017.1〕

¹¹ 〔岐阜県博物館協会〕より作成。

¹² 前述3

¹³ 歴史民俗博物館建設補助（1970）、ふるさと創生事業（1988）を挙げている。他に、風土記の丘構想（1966）なども加えることができるだろう。

¹⁴ 〔西尾円, 岐阜県の社会教育行政と博物館 明治から昭和・岐阜県博物館協会創立の時期まで, 2016〕〔土山公仁, 2016〕〔西尾円, 広瀬鎮と岐阜県博物館協会, 2016〕〔石田克, 2016〕

¹⁵ 〔内田俊秀, 2009.5〕〔平川新・佐藤大介・高橋修・奥村弘, 2014.10〕

¹⁶ 例えば、千葉県博物館協会（〔千葉県博物館資料救済体系構築実行委員会, 2014〕）、神奈川県博物館協会（〔神奈川県博物館協会, 2015.3〕）、三重県教育委員会・三重県博物館協会・みえ歴史ネット、愛知県博物館協議会、静岡県教育委員会・静岡県博物館協会が体制が整備されている。他に京都市の文化財市民レスキューは地域住民との連携による活動で注目される。

これら全国規模の情報集約と連携のため、独立行政法人国立文化財機構（東海地区は京都国立博物館が担当）で文化財防災ネットワーク推進が図られている（〔文化財防災ネットワーク推進事業 中部・近畿文化財関係者による文化財防災連絡会議, 2016〕）。

和歌山県の事例は〔浜田拓志, 2015.7〕を参照。

¹⁷ 〔平川新, 2014〕

¹⁸ 和歌山県では県教育委員会生涯学習局文化遺産課が被災の想定される沿岸部に立地する社寺に未指定を含む文化財の所在調査（アンケート）を実施し、管理台帳を整備したほか、県立博物館・県立文書館が従前から行っていた民間所在資料保存調査を継承・発展させ、文化庁補助事業「地域に眠る災害の記憶の発掘・共有・継承事業」を実施している。これらの活動は県博物館施設等災害対策連絡会議（2015～）が引き継ぐ形で、調査内容を報告する小冊子（〔和歌山県立博物館, 2015〕〔和歌山県立博物館, 2016〕）の配布や現地学習会を開催して成果を地域住民と共有・還元している。詳細は〔浜田拓志, 2015.7〕を参照。

また、所要1日程度の悉皆調査による所在把握と所蔵家1軒ごとの文書群の保存記録を組み合わせた「宮城方式（宮城資料ネット方式）」（〔平川新・佐藤大介・高橋修・奥村弘, 2014.10〕）は広範囲における文化財の所在を把握し、バックデータを集積して成果を上げている。¹⁹ ここでは詳述しないが、博物館建設ラッシュ期は、観光事業の勃興期でもあった。とくに飛騨高山は、国鉄（現JR）の「ディスカバー・ジャパン」キャンペーン（1970-76）やその後の観光戦略における主要な人気観光地として発展してきた。また、近年、行政による観光開発が盛んな関ヶ原には、かつて多くの私設館があって、民間による観光客誘致が行われていたようすが伺える。

²⁰ 〔佐藤泰, 2015〕〔津波により被災した文化財の保存修復技術の構築と専門機関の連携に関するプロジェクト実行委員会, 2016〕など。東海地区では、陸前高田市の支援に積極的な名古屋市で展覧会「陸前高田のたからもの」（2016年2～3月、名古屋市博物館）が開催された。²¹ 〔「震災から復興」指名担う公共施設／博物館や図書館 郷土史として後世に, 2016〕〔揺れに強い構造知る手掛かりに 濃尾地震の建築被害紹介 名古屋で企画展, 2015〕

²² 〔村田真宏, 2016.12〕

²³ 2016年7月実施時に見学。地震によって照明が消えた室内から、予め設定されている避難ルートを実際に通って確認する内容であった。

²⁴ 2015年12月9日実施・見学。神奈川県博物館協会では協会内に防災ワーキンググループを設置し、対策の協議が重ねられている。〔神奈川県博物館協会, 2015.3〕を参照。

²⁵ 〔岐阜県博物館協会で中濃部会, [2007]〕

²⁶ 〔文化財に「指定予備群」、地域の宝守れ 京都府が修復助成, 2017〕

岐阜県博物館協会加盟館の閉館リストと所蔵物の移動について

表3 岐阜県博物館協会加盟館の閉館状況まとめ

重複または存続

*文末「文献」欄に列記

数字 閉館年
 × 廃絶（現在活動を確認できず）
 ○ 存続
 △ 存続（名称・形態を変更）
 空欄 不明もしくは異称（別称で立項）

館名(五十音順)	所在地(現)	文献(別掲)	掲載年	閉館	コレクション移管状況など	備考		
1 あけ世温泉自然苑の野鳥園	瑞浪市		1969	1967	×			
2 石の博物館	大野郡丹生川村(高山市)	1976	1974		×	「建設進む「石の博物館」丹生川村大橋宣嘉さん」岐阜朝刊 19701102 10面		
3 伊藤裕教コレクション	益田郡下呂町(下呂市)	1976	1974		×	70と関連か		
4 岩邑小学校郷土室	恵那市			1967	×	恵那市立岩邑小学校は1873開校		
5 恵那郷土館	恵那市	1985			×	「資料館めぐり 恵那郷土館」中日朝刊 19770821 10面		
6 老田野鳥館	高山市	1985	1976		2008	→東京大学総合研究博物館(寄贈)、山階鳥類研究所(寄贈)		
7 大垣市児童文化センター	大垣市	1985	1976	1974	1969	1967	△ 大垣市サイトピアセンター(文化会館・学習館・こどもサイエンスプラザ)は1992閉館	
8 大塚集古資料館	岐阜市	1985			1988	→国立歴史民俗博物館(1990・93・94購入) 大飛木材株式会社創業70周年記念として1979閉館		
9 小川栄一コレクション展示室	揖斐郡大野町	1976	1974	1969	1967	×	小川栄一は岐阜県文化財調査委員 →岐阜市歴史博物館	
10 奥美濃郷土館	郡上郡八幡町(郡上市)	1976	1974	1969	1967	×	「城山に奥美濃郷土館 八幡町の武藤隆一さん」岐阜朝刊 19661108 6面 「博物館へ行く 14 奥美濃郷土館」岐阜朝刊 19770930 8面	
11 落合郷土館	中津川市			1967	×	「平田学派の書物1,000冊 中津川の落合郷土館で発見」中日夕刊 19670907 6面		
12 笠松中学校校内科学博物館(改築中)	羽島郡笠松町			1967	×	笠松中学校博物館委員会『資料「ナガキ(化石)」の調査・研究』(刊行年不明) 笠松町立笠松中学校は1947開校		
13 合掌造り生活資料館	大野郡白川村	1985			○	和田家 合掌造り民家園とは別		
14 神坂文化資料館	中津川市	1976	1974		×	「神坂文化資料館できる 中津川市」朝日朝刊 19721204 13面		
15 上之保村尚古館	武儀郡上之保村(関市)	1985			×			
16 川上村郷土館	恵那郡川上村(中津川市)	1985			×			
17 貴異美術館	郡上郡八幡町(郡上市)	1976	1974		×			
18 菊花石館	岐阜市	1976	1974	1969	1967	×	「山口誓子も訪れる 菊花石館」毎日朝刊 19660313 16面 「菊花石館をご訪問 三笠宮ご夫妻」岐阜朝刊 19741001 10面	
19 岐阜県ラン科植物園	岐阜市			1969	×			
20 岐阜公園水族館	岐阜市		1974	1969	1967	1999	→上野動物園、黒谷自然公園(川辺町閉鎖)など 「岐阜市 岐阜公園水族館の悩み 魚荒しに手焼く」毎日朝刊 19570526 5面 「岐阜市の岐阜公園水族館の魚や動物、引き取り先決まる」朝日朝刊 19990612 25面 公園再整備に伴い閉鎖	
21 岐阜公園(淡水魚水族館・小動物園)	岐阜市	1985	1976		1999	か	1950閉館 「日本初淡水魚水族館」と紹介	
22 岐阜公園鳥類センター	岐阜市		1974	1969	1967	1999	か	
23 岐阜大学農学部植物園	各務原市か				1967			
24 岐阜大学農学部付属植物園	各務原市	1976	1974	1969				
25 岐阜プラネタリウム	岐阜市	1985	1976	1974	1969	1967	1984	「創立25周年の岐阜プラネタリウム」岐阜朝刊 19830401 16面 「岐阜プラネタリウム 27年の歴史に幕取り壊し市制百年公園に」岐阜朝刊 19851219 15面
26 教育資料館	関市	1976	1974		×	池村教育資料館	「池村兼武 動植物の標本3000点」中日夕刊 19610418 5面 「池村兼武 池村教育資料館長」中日朝刊 19761224 13面	
27 郷土玩具館	高山市	1985	1976	1974		○	高山郷土玩具館	
28 郡上工芸研究所	郡上郡八幡町(郡上市)	1985			△		1952郡上郷土芸術研究所→1958郡上工芸研究所→1980南足柄工芸研究所(研究室とも)	
29 郡上染織史料館	郡上郡八幡町(郡上市)	1976	1974	1969		×	→郡上八幡博覧館、岐阜県美術館 郡上染織資料館か 宗廣力三(1914-89)	
30 防人センター・忍者の里	不破郡関ヶ原町か	1976			×		「防人センター・忍者の里 実物大の零戦の模型展示 マニアが100万円かけてつくる」中日朝刊 19760110 13面	
31 軍事博物館と忍者の里	不破郡関ヶ原町	1985			×		30と同じ	
32 国府町歴史・民俗資料館	高山市		1976		△		高山市に合併後、所蔵庫として使用 「国府町歴史民俗資料館 国府の民俗館移築 沼田で地盤沈下 完成わずか3年足らず」毎日朝刊 19770624 13面	
33 国府町郷土館・民俗館	吉城郡国府町(高山市)	1985					32と同じ	
34 後藤植物研究所展示室	関市	1976	1974	1969	1967	2006	か 白銀登落荘とも →琵琶湖博物館(魚類標本を寄贈) 「後藤宮子 長良川の魚類標本114万匹 新収納庫で整理開始」読売朝刊 19921230 17面 「後藤宮子さん 標本収蔵庫 白銀登落荘と命名」朝日朝刊 19930314 22面 「後藤宮子 白銀登落荘館長」読売朝刊 19960109 23面 「関市の後藤宮子さん 琵琶湖博物館に魚標本60万点寄贈」岐阜朝刊 20061014 24面	
35 三郷(みさと)中学校郷土室	恵那市			1967	×		1979恵那市立恵那西中学校に統合	
36 自然保護資料室	岐阜市	1976	1974		×			
37 下保森林総合展示室	大野郡丹生川村(高山市)	1985			△		ぎふ森林文化センター(岐阜市、1994〜)か 「岐阜市 ぎふ森林文化センターが完成」読売朝刊 19941213 26面	
38 下野郷土館	恵那郡福岡町(中津川市)	1985	1976	1969		×		
39 春慶会館	高山市	1976			2014		一部売却か 長瀬清が私設展示館として1973開館 「高山市 神田町の春慶会館跡地に建設するサービス付き高齢者向け住宅(サ高住)の起工式」岐阜朝刊 20150428 飛騨27面	
40 飛騨高山春慶会館	高山市	1985					39と同じ	
41 白木菊花石館	岐阜市	1985			×			
42 青邨記念館	中津川市	1985	1976	1974	1969	1967	2015	中津川市蔵(一部寄託) 中津川市苗木遠山史料館で保管
43 関ヶ原大爬虫類センター	不破郡関ヶ原町		1974			×	「関ヶ原大爬虫類センターあす閉館」岐阜朝刊 19711029 12面	
44 関ヶ原縄文遺跡と考古館	不破郡関ヶ原町			1967			45・46と同じ	
45 関ヶ原の縄文遺跡と考古館	不破郡関ヶ原町			1969			44・46と同じ	

館名(五十音順)	所在地(現)	文献(別掲*)	掲載年	閉館	コレクション移管状況など	備考
46 関ヶ原縄文遺跡考古館	不破郡関ヶ原町	1976 1974		1978か		「関ヶ原縄文遺跡考古館 雪に無残廃屋同然 個人管理も限界」岐阜朝刊 19780423 13面
47 蘇原公民館郷土室	各務原市	1974 1969 1967			各務原市中央ライフデザインセンター(1993~)か	「各務原市蘇原公民館600冊の本購入」中日夕刊 19810714 6面
48 谷合公民館郷土室	山県郡美山町(山県市)	1976 1974 1969 1967		1982か		「美山町谷合公民館完成」中日朝刊 19820129 16面
49 谷汲植物園	揖斐郡谷汲村(揖斐川町)	1976 1974 1969 1967			谷汲ゆり園(1996~)か	「谷汲村に東海3県最大の百合園「谷汲ゆり園」オープン」中日朝刊 19960622 20面
50 飛山民俗館	益田郡金山町(下呂市)	1985 1976 1974		×		
51 日本自動車館	大野郡宮村(高山市)	1976 1974		×		
52 日本歴史館	可児市	1985		2010か	看板表記によると可児町(1955-82)期開館 2015看板現存	「ぶらっとミュージアム 日本歴史館」毎日朝刊 19930617 17面 「日本歴史館(可児市) 可児郷土歴史館」岐阜夕刊 19970716 1面
53 濃飛甲冑研究所展示室	岐阜市	1976 1974 1969		×	吉田ライブラリー併設 よろいの館吉田濃飛甲冑研究所とも →岐阜市歴史博物館(一部寄贈)	吉田幸平(1919-2013) 歴史文化センター建設準備委員会『吉田幸平博士 博物館構想及び自録』1975 「吉田幸平さん 吉田ライブラリーを開設 専門書約 2万冊を有料で貸し出し」中日朝刊 19860802 14面 吉田幸平『奇人山上八郎伝』よろいの館吉田濃飛 甲冑研究所 1992.4
54 野島甲冑美術館	高山市	1976 1974		×		
55 羽島中学校郷土室	羽島市			1967	×	羽島市立羽島中学校は1947開校
56 歯の博物館	岐阜市	1985		2010	岐阜県歯科医師会が運営 1982開館 岐阜県博物館に寄贈の照会あり(受領なし)	「歯の博物館建設へ 岐阜市口腔保健衛生センター内に」岐阜朝刊 19800119 11面 「歯の博物館建設 完成へ着々」朝日夕刊 19810408 6面 「岐阜市 歯の博物館」中日朝刊 19820501 13面 「『歯の博物館』6日閉館 30年近く『歯と体の健康』啓発続ける」岐阜朝刊 20100129 18面
57 飛驒御殿	高山市	1985		×		
58 飛驒郷土館	益田郡下呂町(下呂市)		1969 1967	△	1963開館 小坂郷土館(下呂市小坂町湯屋) [参照]1972中部山岳考古館→1985峰一合遺跡考古館→1995下呂ふるさと歴史記念館(下呂市森)	「下呂の飛驒郷土館完成 来月公開」毎日朝刊 19630320 12面 「文化財保護 文化遺産に防火装置 永保寺と飛驒郷土館の合掌づくり」岐阜朝刊 19641116 10面
59 飛驒工芸館	高山市	1985		×	1975開館	「飛驒民俗村・飛驒の里 飛驒工芸館無料で開館」朝日朝刊 19750514 17面 「飛驒工芸館がオープン」毎日朝刊 19750515
60 飛驒工匠館	高山市	1985 1976		1988か	1975開館	「飛驒工匠館 歌人 福田夕咲の美家 飛驒工匠館に衣替え 来月上旬オープン」中日夕刊 19750307 12面 「飛驒工匠館 文学と民芸品を合わせ紹介 工匠館」毎日朝刊 19750407 13面 「高山 飛驒工匠館半焼」朝日夕刊 19880206 7面
61 飛驒集古館	大野郡丹生川村(高山市)	1976 1974		×	1970開館	「改装した飛驒集古館 あすオープン」岐阜朝刊 19700425 13面 「飛驒集古館 江戸 明治時代の農具を集める」中日朝刊 19700927 19面
62 斐太彦天文處	大野郡清見村(高山市) 岐阜市	1985		△	坂井義雄が陸軍軍気観測所を転用して岐阜金華山天文台(岐阜市)設置(1951-58) 1972開館→1986飛驒プラネタリウム(公営) →小川天文台(長野県小川村)	「天文台 軌道に乗る斐太彦天文処 清見村夏夏 休みに同好会発足」中日朝刊 19780623 13面 「坂井義雄 斐太彦天文処」中日朝刊 19810825 11面 「清見村がプラネタリウム建設 斐太彦天文処の横に」中日朝刊 19850806 14面
63 飛驒風物館	高山市	1985 1976		×	1973開館	「飛驒風物館」開館」朝日朝刊 19730930 13面
64 飛驒民俗館	高山市		1969 1967	△	1959開館 飛驒の里(1971~)と併せて、飛驒民俗村・飛驒の里 重要有形民俗文化財・飛驒のそりコレクション(1960指定)、飛驒の山村生産用具(1975指定)あり	「飛驒民俗館 いまどき珍しい塩船 ジュラ紀の化石 寄贈される」毎日朝刊 19591125 5面 「飛驒民俗館 『博物館法』適用の施設指定を申請」毎日朝刊 19601117 5面 「飛驒民俗館が博物館並に 文部省から指定」朝日朝刊 19610114 「養蚕方式を重民資料に 飛驒民俗館」岐阜朝刊 19630121 5面 「飛驒民俗館20周年式」岐阜朝刊 19790630 16面
65 飛驒民俗資料館	古城郡古川町(飛驒市)	1985 1976		1988		「飛驒民俗資料館 古川町井之口さん」朝日朝刊 19740408 13面 「私財投じて15年 古川の飛驒民俗資料館開館」中日朝刊 19881029 17面
66 洞戸村民俗資料館	武儀郡洞戸村(関市)	1976 1974		×		
67 松枝小学校民俗資料館	羽島郡笠松町	1985			笠松町歴史民俗資料館→2015笠松町歴史未来館	笠松町立松枝小学校は1894開校
68 美山民俗資料館	山県郡美山町(山県市)	1976 1974		△	2003山県市歴史民俗資料館・分室(山県市葛原郷土研修室、山県市みやまジョイフル倶楽部、山県市谷合郷土研修室)	
69 大和民俗資料館	郡上郡大和村(郡上市)	1985			1977明宝歴史民俗博物館	2004郡上郡7町村が合併、郡上市に
70 祐教コレクション付知峡博物館	恵那市		1969	×	1968開館	3と関連か 「付知峡博物館を着工」岐阜朝刊 19671209 7面 「付知峡博物館 8月に開館」岐阜朝刊 19680602 15面
71 養老植物教材園	養老郡養老町		1967		養老公園の竹類園	竹研究者・坪井伊助収集の「竹類標本園」
72 陸上自衛隊岐阜駐屯地 美術史料館	岐阜市か		1967	×		陸上自衛隊普通寺駐屯地資料館(香川県普通寺市)は2006より一般公開
73 陸上自衛隊岐阜駐屯地史料館	岐阜市	1974 1969				72と同じ

出典(順不同)：

宗慶力三：東文研アーカイブデータベース (HP：東京文化財研究所) <http://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9803.html> (2017年1月25日閲覧)

菊池昌治、郡上柚再興の道(現代構造研究所, 1991, テキスタル・クリエーション[1]: 創造の美学, 繊維工業構造改善事業協会)

※中小機構: 経営力の強化: テキスタル・クリエーション[1]: 創造の美学 <http://www.smj.go.jp/keiei/chose/seni/archives/045297.html> (2017年1月25日閲覧)

[追記]養老公園・竹類園(ブログ: 「岐阜の自然者」をめぐる旅) aquatottoday.hatenadiary.jp/entry/2016/09/23/000200 (2017年1月26日閲覧)

日本公開天文台協会公開天文台白書編集委員会, 2007, 公開天文台白書, 2006, 兵庫県立西はりま天文台公園 p9

坂井義人, 2002, 岐阜金華山天文台・坂井義雄の思い出(宇宙会会報 17, 2002.12)

※小川天文台の歴史(5) (HP: 小川天文台) http://www.bekoame.ne.jp/masa-ki/ogawa_tenmondai/histry/history_05.html (2017年1月26日閲覧) に転載

坂井義人, 2015, 岐阜金華山天文台の活動意義と坂井義雄(第5回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録(2015) 5, 2015.1)

下呂ふるさと歴史記念館(縄文公園) (HP: 下呂市) http://www.city.gerogig.jp/departement/Top/node_1069/node_1155/node_27591 (2017年1月26日閲覧)

「飛驒高山春慶会館」, 41年の歴史に幕(ホームページ: 飛驒経済新聞) <http://hida.keizai.biz/headline/677/> (2017年1月26日閲覧)

編集余記「後藤コレクション寄贈について」(岐阜新聞20061102)

小川貴司, 2005, 小川栄一日誌に見る岐阜郷土館 戦時下の博物館活動について(岐阜市歴史博物館研究紀要 17, 2005.3)

老田野鳥館から標本・図書受入(山階鳥研NEWS 219, 2008.9)

※老田野鳥館から標本・図書受入 (HP: 山階鳥類研究所) http://www.yamashina.or.jp/hp/wadai/backnumber/2008_9_04.html#03 (2017年1月25日閲覧) に転載

松原始, 老田敬吉氏収集の鳥類標本 (HP: 東京大学総合研究博物館) http://www.um.u-tokyo.ac.jp/web_museum/ourboros/v17n3/v17n3_matsubara.html (2017年1月25日閲覧)

織豊期・西美濃高木氏の動向 — 「高木家文書」を中心として —
Table of Contents Trend of the Takagi family lived in the western
Mino province during the Shokuko period — A Focus on Takagi-ke
monjo (Takagi family documents) —

山田昭彦¹
Akihiko Yamada¹

¹ 岐阜県博物館

要旨

織豊期における西美濃の領主・高木氏の動向について、信長・秀吉・家康との関りを「高木家文書」から考察する。

はじめに

岐阜県博物館では、平成二七年度春季特別展「天下人の時代」信長・秀吉・家康と美濃」²として、信長、秀吉、家康三人の天下人に関連する資料を美濃との関りを中心に展示した。

岐阜の地は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三人が統一権力を形成していくなか、重要な役割を果たした。ほぼ十年にわたり岐阜に本拠地をおいた信長、美濃攻略をはじめとして、美濃を基盤に台頭の糸口をつかんだ秀吉。関ヶ原の戦いで政権の帰趨を決した家康とそれぞれの「天下人」にとってこの地は画期となる場所であった。

今回の展示は、「天下人」の実像について、郷土岐阜とかかわりの深い、国宝「島津家文書」(東京大学史料編纂所蔵)、重要文化財「毛利家文書」(毛利博物館所蔵)、同『信長記』(岡山大学附属図書館所蔵)、といった第一級の資料群からその実像に迫ることを意図して構成した。

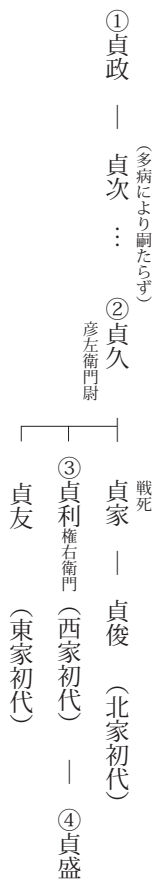
今回の展示では、こうした指定文化財と並んで、地元には伝えられた「高木家文書」

(個人蔵・岐阜県歴史資料館寄託) から9点、岐阜県重要文化財「石山合戦資料ならびに安養寺文書」から2点を展示した。本稿では、こうした、在地伝来の文書を中心に、主として高木氏の動向について考察を進めることとする。

一 「高木家文書」について

高木家は、家伝²によれば大和国高木郷を本貫とし、伊勢を経て享禄元年(1528)美濃国石津郡に移ったとされる³。祖とされる高木貞政は、斎藤氏に服し、弘治二年(1556)には駒野郷ほかを斎藤義龍から安堵されている⁴。高木氏は揖斐川下流の駒野(現海津市南濃町駒野)に居城を構え、西濃地方南部を代表する有力武士であった。高木直介(貞久)は、永禄七年(1564)信長の美濃攻略に応じ、天正二年(1574)には揖斐川下流の今尾(現海津市平田町今尾)を居城とした。本能寺の変後は秀吉の圧力に抗して、織田信雄に臣従するとともに、徳川家康との関係を築き、小牧・長久手の合戦においては、その一翼を担った。天正十八年、秀吉により信雄が改易されると、高木一族は西美濃の地を離れ、甲斐の加藤光泰に仕え、その配下として朝鮮出兵にも加わった。

その後、徳川家康に仕え、関ヶ原合戦の軍功により美濃石津郡時、多良郷のうち貞利(貞久の次男・西家)が二千三百石、貞友(貞久の五男・東家)、貞俊(貞久養子(長男貞家の子)・北家)が各々千石を拝領し、都合四千三百石の石高をもち個別に領主権を形成した。また、江戸時代、高木家は交代寄合に列し、参勤交代を許されるなどその格式は大名に準じている。



また、西高木家は近代になってからも、郡長や衆議院議員を歴任し、地域の名望家として存続したため、同家の古文書は散逸を免れ、総点数十三万点に及ぶ古文書群が名古屋大学附属図書館をはじめとして各地に残された。これだけの文書群がまとまっ

て残されることは珍しく、近世領主制の展開を考察する上でも貴重な資料ということができる。なかでも今回展示した資料（個人蔵・岐阜県歴史資料館寄託）は、家の来歴を証明する大切な資料として西高木家に伝えられたもので、高木氏と信長・秀吉・家康との関りを考察する上で欠くことのできない資料で、「高木家文書」中でも中核をなす文書群である。今回はそのうち、特に重要と考えられる次の9点の天下人もしくはその周辺に関わる文書を展示した。

（史料1） 高木直介宛織田信長書状（永禄七年九）

（史料2） 吉村名字中外三名宛織田信長朱印状（天正二年）

（史料3） 高木彦左衛門尉宛織田信長朱印状（天正二年）

（史料4） 今尾町市宛織田信忠判物（天正八年）

（史料5） 高木権右衛門尉宛織田信雄黒印状（天正十四年）

（史料6） 高木権右衛門尉宛羽柴秀吉書状（天正十年）

（史料7） 高木権右衛門尉宛羽柴秀吉書状（天正十一年）

（史料8） 高木権右衛門尉宛羽柴秀吉書状（天正十一年）

（史料9） 高木権右衛門尉同名衆中宛徳川家康書状（天正十二年）

これらの文書のうち、（史料2）は、今尾城において高木氏の配下に置かれた吉村名字中の三氏に対して発行されたもの、（史料4）は高木氏支配下の今尾町市宛であったためそれぞれ高木氏の下に残されたもの。その他の7点は、いずれも高木氏に對して直接宛てられたものである。本稿ではこうした資料を中心として考察することとする。

二 信長と高木氏

① 信長の美濃進出

高木家は、揖斐川下流駒野の地（現海津市南濃町駒野）に居城を構えた西濃地方南部の有力武士であった。高木直介（貞久）は、弘治二年（1556）には西駒野郷等六ヶ所を斎藤義龍から安堵されたが、永禄七年（1564）4月に池田郡市橋荘を本拠とした市橋長利を介して信長に内応した。

（史料1） 高木直介宛織田信長書状

市橋して御物語誠令祝着候、弥々御馳走可畏入候、猶、彼口上申含候、恐々謹言

（永禄七年九）

四月廿四日 信長（花押）

高木直介（貞久）殿

信長は同年6月明院良政・滝川一益を通じて徳山次郎右衛門（則秀・本拠は徳山谷）へ書状（「徳山家記録」・奥野高廣『増訂織田信長文書の研究』上巻所収）、7月市橋長利を介して国枝古泰（本拠は揖斐郡本郷）に越前朝倉氏への連絡を依頼する書状（『国枝文書』・『増訂織田信長文書の研究』上巻所収）を出しており、西美濃において揖斐川筋の調略が進みつつあることがわかる。永禄十年（1567）、信長は斎藤竜興を放逐し、その本拠井ノ口を岐阜と改め居城とした。これをもって、4代にわたって美濃を支配した戦国大名斎藤氏は実質上滅亡し、在地の有力武士は、信長の家臣団として再編成された。

美濃を本拠とした信長は、永禄十一年（1568）前將軍義輝の弟義昭（一条院寛慶）を越前から岐阜正法寺に迎えた上、ともに上洛し將軍宣下を取り戻すことに成功した。しかし早くも、その翌永禄十二年（1569）には両者の間で対立が深まることとなる。

② 反信長包圍網の中で

元亀元年（1570）信長は、本願寺に対して錢五千貫と大坂退去を要求した。法主顕如は、全国の坊主、門徒に法敵打倒のため蜂起を命じた。濃州郡上惣門徒中に対してもこの命令が下されており、その中心であった安養寺（現郡上市八幡町）には次の文書が残されている。

「濃州郡上惣門徒中 顕如」（端裏切封）

就信長上洛、此方令迷惑候、去々年以来、懸難題申付而、随分成扱、

雖応彼方候、無其専、可破却由、慥告来候、此上不及力候、然者 開山之一流、

此時無退転様、各不顧身命、可抽忠節事難有候、若無沙汰輩者、長不可為門徒候、併馳走頼入候、六賢、

(元龜元年)

九月二日顕如(花押)

濃州郡上惣宗徒中

(「石山合戦関係文書及び安養寺文書」)

以後、天正八年(1580)までの十年余りに及ぶ石山合戦の始まりを告げる文書である。これを機に越前・伊勢といった美濃を取り巻く地域においても一揆が頻発した。とりわけ伊勢においては、長島の願証寺を中心として、木曾・長良・揖斐の河口の島々に門徒が立て籠もり、徹底抗戦を繰り広げた。信長軍は、緒戦において信長の弟で古(小)木江城主であった織田信興が敗死するなど苦戦を重ねた。元龜二年(1571)、信長は5万人余の兵力をもって、長島を攻撃した(第一次長島攻撃)が、輪中を利用した一揆軍に苦戦し、高木氏の寄親でもあった美濃の有力武将氏家ト全が石津郡太田村(現海津市南濃町)で敗死するといった惨敗を喫している。またこの時期、將軍足利義昭と信長の関係にさらなる緊張関係が生じていた。

至勢州人数共相越候由、如何無心元候、為其見舞、旁差下狩野伊豆守候、次越後使僧、昨日歸来候、輝序(虎力)言上通、具可演説候、猶、異見次第可申下候哉、就中、牢人共相催候由候、不実候、於事实者、追々可注進候、委細藤孝(細川)・惟政(和田)可申候也、

(元龜二年)

五月十二日 (義昭花押)

安養寺

(「石山合戦関係文書及び安養寺文書」)

この書状は、足利義昭が美濃国安養寺に対して、側近である細川藤孝、和田惟政を介して宛てたものである。ここからは、義昭が伊勢長島の一向一揆に関与するとも、越後の上杉氏とも連絡を取り合っていたことが窺える。言い換えれば、足利義昭が

結節点となり本願寺、上杉謙信といったいわゆる信長包囲網の構築に関わる書状といえる。『岐阜県史』史料編古代・中世一は、元龜三年発給の可能性を説くが、和田惟政は、元龜二年八月に池田知正との間でおこなわれた摂津郡山の戦いで戦死している。そのため、ここでは、元龜二年に比定した。

天正元年(元龜四年・1573)義昭は、二度にわたり挙兵したが敗れ室町幕府は終焉の時を迎えた。しかしその後も義昭は、紀伊興国寺から備後鞆へと居を移しつつ反信長の姿勢を保った。翌二年(1574)の美濃においては、二月に武田勝頼の東美濃侵入、伊勢長島一揆との対峙といった厳しい状況が継続していた。

(史料2) 高木彦左衛門尉宛織田信長朱印状

今尾城之事

高木彦左衛門尉二申付候、諸事可然様二

令相談、無粗略馳走簡要候、謹言

二月朔 信長(朱印)

吉村名字中

木村十兵衛とのへ

田中 貞吉とのへ

西松忠兵衛とのへ

(史料2)は、こうした状況下において、西濃地方の安定を図るために、今尾城(現海津市平田町)の守護を高木彦左衛門尉(貞久)に申し付ける(『寛政重修諸家譜』、以後『寛政譜』とする)とともに、在地領主である吉村名字中の三氏に対して、その協力を命じたものである。

その後、同年九月には長島の一向一揆に対して、志摩九鬼氏率いる数百隻の軍船動員など7万人余の兵力を投入し壊滅させることに成功。また、一揆勢に呼応する形で東美濃に侵攻した武田勝頼を撃退した。信長、家康の連合軍が長篠・設楽ヶ原の戦いで武田勝頼軍を撃破するのは、その翌年のことである。

③天下人と鷹狩

この直後、信長は美濃の在地領主に対して、鷹狩に関して次のような命令を出している。²⁶⁾

(史料3)

尚以、討当候ハぬ様ニ可追立事簡要候

就鷹野鉄炮雖令停止其辺者無越事之条、領中分鶴雁其外諸鳥

冬春鷹野之間可討旨可申付也

天正二 十二月九日 信長(朱印)

高木彦左衛門尉とのへ

この文書から、信長は高木彦左衛門尉(貞久)の支配地周辺に鷹狩場を設置していたことがわかる。信長が発令した同様の文書は、次の二通が確認できる。(『増訂織

田信長文書の研究』上巻所収)

(史料A)

尚以、討当候はぬ様ニ、切角可追立事簡要候、

就鉄炮停止、此方鶴・雁諸鳥希候、然者其辺知行分相触、

冬春鷹野之間、鉄炮可放旨可申付候也、

天正二

十二月九日

不破大炊助殿

田中真吉 殿

(史料B)

尚以、あたり候ハぬやうに、可追立事簡要候、

就鷹野鉄炮雖令停止、其辺者不入之条、

冬春鷹野之間、領中分鶴雁其外諸鳥可討旨可申触候也、

天正二

十二月九日

神野源六郎とのへ

伊藤七郎左衛門とのへ

吉村又吉郎とのへ

(史料A)は、文書そのものが備前池田家に伝えられたことから、両氏は池田氏の組下と考えられる。また(史料B)では、(史料2)同様宛所に吉村氏が記されている。このように、西濃各地の在地領主に対して、同一の日付、ほぼ同一の内容で鶴・雁を追い立てるよう指示が出されたことが確認できる。伊勢長島の一向一揆を壊滅させた安堵感も感じられるが、戦国大名にとって鷹狩りは単なる嗜好にとどまらず、重要な軍事訓練の場でもあった。そのため、信長が周囲の勢力と対峙するといった緊迫した状況の中、軍事動員・訓練の一環として発令されたものと考えられよう。のち、天下統一を成し遂げた豊臣秀吉も、同様の命令を、四国、九州、東北地方の大名たちに出している。

(史料C)

於伊予国中

鶴・白鳥・雁・鴨其外諸鳥、如去年、以鉄炮討之、又者獵師等申付、鳥共可進上之候、

他所如此被仰付候者、御鷹場ニ被留置候所へ、諸鳥可集来候之間、入精可申付候。

尚山中山城守可申候也。

九月十六日(朱印)

加藤左馬助殿

(「大坂城天守閣所蔵文書」)

(史料C)は信長が、美濃で命じた内容を全国規模に拡大したものと考えられるが、こうなると鷹狩における獲物確保の実効性を考えた場合、命令そのものが荒唐無稽の内容となる。ここでは、天下人秀吉による各大名への示威、動員といった側面をより一層強く示した内容として捉えることができる。

以上、美濃高木氏を中心として、信長の美濃支配について周辺諸勢力との関りから確認した。先にみた、鷹狩準備の指示から4か月後の天正三年三月、浜松の徳川家康は同盟関係にあった織田信長に対して次のような書状を送っている。

(史料)

今度御兵糧過分被仰付候。外聞実義敵国覚、

旁以恐悦不及是非候。殊諸城為御見舞佐久間被為差越候。

是亦過当至極候。此表様子具右衛門可被申上候。

猶從是以使者可得御意候。恐惶謹言。

三月十三日 家康(花押)

岐阜殿人々御中

(「大坂城天守閣所蔵文書」)

信長は、武田勝頼の三河侵攻に対すべく、徳川家康に大量の兵糧を送っており、これはそれに対する礼状にあたる。この後、信長は岐阜を出立し、同年五月長篠合戦という形で武田氏との戦いにおおよその決着を付けることとなる。美濃を攻略した永禄十年(1567)から本拠地を安土に移す天正四年(1576)までのおおよそ十年の間、信長は岐阜の地を本拠地とした。今回の展覧会では、この時期を家康文書の宛所にちなみ「岐阜殿の時代」と名付けた。この時代、家康が敬称した如く、まさに天下に「岐阜殿・織田信長」が轟いた時代であった。

三 豊臣と徳川の間で

① 秀吉の台頭

ここでは、本能寺の変後、豊臣秀吉が台頭する過程で、各勢力から旗幟を明確にすることを求められ、織田信雄・徳川家康、豊臣秀吉のそれぞれと関係の構築に努める高木氏の姿勢を考察する。「東高木家文書」に次の高木彦左衛門尉宛羽柴秀吉書状がある。

御状拝見申候、如仰今度京都不慮之仕合、無是非儀二候、
(中略)

一 爰元隙明條、明日其国へ相越候條、以面可申入候、御身上之儀、不可有疎意候、御息何とやらん承候、無御心元候、旁期後音候、恐、謹言

六月十九日

羽築

高木彦左衛門尉殿

御返報

秀吉(花押)

(『岐阜県史』史料編古代中世一所収)

この書状からは、彦左衛門尉貞久は、秀吉宛に書状を出していたと考えられる。それに対する秀吉の返報としては、山崎の合戦について6項目にわたり詳述した後で、明日二十日には美濃に入るので直接話すこと、彦左衛門身上について「疎意」はないとした上で、子息の行動について、「何とやらん」と強い不快感を示している。文書のやり取りでこれ以上秀吉の憤りを伺うことはできないが、『寛政譜』の記載から彦左衛門尉の嗣子である権左衛門尉のこの時の行動を考察することができる。

十年右府明智光秀がために弑せらるゝにより、東照宮光秀を御誅伐あるべしとて、御使として水野藤助長勝を下され、居城今尾を御旅館とし、且その辺川渡等の事をうけたまはるべきむね仰せをかうぶる。なお其地の事怠りなく沙汰すべき旨の書翰を贈る。(『寛政譜』)

六月二日本能寺の変の際、堺にいた徳川家康は、四日岡崎に戻り、十四日信長の弔い合戦のために鳴海まで出陣している。(山崎の合戦の報に接し二十一日には浜松に帰着)

天正十年六月本能寺の変、山崎の合戦と天下の行方が大きく動く中で、徳川氏と気脈を通じつつある高木権左衛門尉に対して、秀吉は不信任を抱いている。秀吉は、この書状にあるとおり岐阜入りし、二十七日には、清須会議に臨んでいる。

(史料6) 高木権右衛門尉宛羽柴秀吉書状

爰元隙明候条今日津嶋をとおり晚二八石たて、はや尾着陣、それより長浜歸城候、然者、船之事此節候間、

一艘も不残可被差寄候、御油断候てハ御為不可然候、恐々謹言
六月廿八日 羽築 秀吉(花押)

高木権右衛門尉殿 御宿所

この書状は、同月二十八日、豊臣秀吉によって出されたもの。手紙の出された前日・六月二十七日には、信長没後の方針を取り決めた清須会議が行われている。その結果居城長浜への帰路にあたり、今尾城主であった高木貞利に船の用意を求めた内容になっている。文言からは会議直後の緊張感の中、秀吉による居城長浜への周到な移動計画と不信感を抱いていた高木彦左衛門尉への強い動員要求を読み取ることができる。ただ、書札礼としては、書止め文言、宛所とも丁寧な書き方となっており、過渡期の秀吉の姿勢を読み取ることができる。

清須会議の結果、織田家の継嗣は織田信忠の子三法師（後の秀信）とされた。織田信孝は、その後見とともに美濃を領国とし、尾張は織田信雄が領国とすることが決定した。そのため、高木氏も織田信孝から次のような安堵状を発給されている。

吾分領知方、名田共、五百四十式貫五百廿文之内、山林・寺庵・家来跡職、令扶助訖、並天正九年二為新知九拾七貫文余、何も任当知行之旨、全可領知候也、

天正十年七月廿五日 信孝（花押）

高木彦左衛門尉殿

（『岐阜県史』史料編古代中世一 所収）

しかし、その後織田信孝は越前の柴田勝家と結び、秀吉と対立した。天正十年十二月、秀吉は、信孝が三法師を安土に移すことを拒んだことを理由に、戦端を開き岐阜城を囲んだ。この時高木氏に対して送った書状がある。

御状令披見候、先書如申、昨日十六日、至大柿令人城候、即西美濃衆何も被罷出、

被出入質、城々へ悉此方人数入置、何様にも三介殿様次第第二覚悟候處、其方之儀、唯今迄延引之段、不能分別候、此方へ無疎略候者、国限郡限之事候間、瀧三存分も在之間敷候間、事二左右をよせられ候て、何かと被申候段、御ため不可然候、早々被相越、人質以下被出置尤候、返事次第可随其意候、恐々謹言

十二月十七日 羽柴 秀吉（花押）

高木彦左衛門殿

高木権右衛門殿

信孝と対立した秀吉は、織田信雄を擁し、西美濃衆に対し人質を差し出すよう求めた。その中で、高木氏は理由をつけてそれを拒み続けた。そこには、北伊勢五郡を本拠とした瀧三（瀧川一益）の存在も利用したことがわかる。秀吉は、この問題は美濃のこと、伊勢の瀧川は関係ないと突っぱね「返事次第可随其意候」と決断を迫った。

（史料7）高木権右衛門尉宛羽柴秀吉書状

今日巳剋及一戦切崩柴修始玄蕃其外一人も不漏、悉討果候、則越州府中まで、先手者早相越候、明日我等も到彼国、相越候間、追而可申候、恐々謹言

卯月廿一日羽筑 秀吉（花押）

（貞利）

高木権右衛門尉殿 御返報

信孝は、秀吉に対して一旦降伏するも、翌十一年二月、柴田勝家と連携し、再度挙兵した。本書状は、天正十一年（1583）に秀吉によって出されたもので、日付はまさに賤ヶ岳合戦当日であり、秀吉軍からみた戦況が誇張を含め力強く伝えられている。現在まで、確認される合戦当日の書状はこの一通のみである。高木氏にとって信長の後継者の地位を固めつつあった秀吉への早急な対応が求められる状況であった。

（史料8）高木権右衛門尉宛羽柴秀吉書状

御状并生鶴一贈賜候、此頃者稀成儀候処二、御志別而祝着之、至候、随而北国表之儀、属平均、一昨日至長浜打入候、猶、期来信候、恐々謹言

五月七日 羽筑 秀吉（花押）

高木権右衛門尉殿 御返報

本書状は、天正十一年（1583）に豊臣秀吉によって出されたもの。前月二十四日には越前北ノ庄にて柴田勝家、五月二日（一説には四月二十九日）には尾張野間にて織田信孝が自害に追い込まれている。その戦勝の祝いとして高木氏から贈られた生きた鶴に対しての礼状である。鷹狩などで捕獲した鶴は、武家社会では進物として利用されたが、当時としても生きた鶴は珍しいものであり、高木氏としても秀吉に対して誠意を見せるに相応しい進物であった。

しかし、織田信孝没落後、美濃の中心勢力は、大坂城を秀吉に譲り大垣城に入った池田恒興、岐阜城に入った池田元助の父子となる。この時から、今尾城主としての高木氏の姿はみられなくなり、代わって恒興の家臣森寺清右衛門（『吉村文書』、『伊本文書』、『岐阜県史』史料編古代中世4所収）、戸倉四郎兵衛（『美濃明細記』）が相次いで城主となった。

この頃、高木氏は、織田信雄から一族四名連名で判物を与えられている。

猶以、四人高頭之儀、以来忠節次第分にて、可申付候也、

本知分並駒野、以手寄引合、壹萬貫文宛行之訖、得其意軍忠専一也、

天正拾貳五月廿一日 信雄（花押）

高木権右衛門尉（貞利）とのへ

高木彦太郎（貞俊）とのへ

高木勝兵衛（貞秀）とのへ

高木彦助（貞友）とのへ

②小牧長久手の戦い

小牧長久手の戦いにおいて、織田信雄は、一万貫文という厚遇を示し高木一族の加勢を求めた。この戦いで美濃の中心勢力である池田恒興、元助を敗死させた徳川・織田軍であったが戦後、岐阜城主は元助の弟輝政とされ、美濃をめぐる勢力関係が変わ

ることはなかった。結果として、この判物は反故となったと考えられる。その後、高木氏が表れるのは蟹江城合戦に関わる次の史料¹⁰においてである

（史料9）高木権右衛門尉同名衆中宛徳川家康書状

書状披見、仍敵之様子注進得其意候、

此表蟹江之儀、今明之内、可令落城候、

可御心安候、尚期後音候 恐々謹言

六月廿二日 家康（花押）

（貞利）

高木権右衛門尉殿

同名衆中

本書状は、天正十二年（1585）に徳川家康によって出されたもの。小牧長久手の合戦直後に行われた蟹江城合戦の状況を示している。小牧長久手の合戦で徳川家康・織田信雄連合軍に大敗を喫した羽柴秀吉が雪辱を期して臨んだ戦いであり、尾張における制海権を確保し、織田信雄と家康の間を分断させるための戦いであった。六月十六日羽柴勢は滝川一益を主将に九鬼水軍を伴い、織田信雄配下であった城代前田長定の内応により蟹江城入城を果たした。しかし、蟹江城と連携関係にあった大野城主山口重政が助力を拒んだことや、徳川・織田連合軍の反撃により蟹江城はわずか6日で落城した。これ以後、秀吉は武力をもって家康を屈服させることを断念しており、文書が出された六月二十二日は、徳川方の総攻撃により蟹江城が落城するまさにその時であった。

この戦いで、高木氏は徳川・織田軍に与し細かく情報提供していたことがわかる。また、次の資料からは、伊勢桑名郡において、織田信雄から領知宛行がおこなわれたことがわかる。

以桑名郡之内七百八拾四貫四百文宛宛行畢

目録別紙在之、全可領知之状、如件
天正拾四年

七月廿三日 信雄（黒印）

また、右の史料に見られる「別紙」は以下の通りである。

目録 北伊勢桑名郡内

百五拾貳貫九百五拾三文 由比郷

八十八貫六百八十三文 多度郷

三百卅四貫七百拾四文 戸津郷

百貳拾七貫七百九拾壹文 下ひぢえ郷

八拾貳貫百六拾貳文 上ひぢえ郷

都合七百八拾四貫四百参文

天正拾四年七月廿三日（黒印）

高木権右衛門とのへ

本書状は、天正十四年（1586）に織田信雄によって出されたもの。天正十二年（1584）の小牧長久手の合戦において、高木氏は伊勢長島を拠点とした織田信雄（つまり徳川家康方）に味方したこと、美濃に近い桑名郡北部の地から七百八十四貫文余を与えられたものである。しかし、この時期美濃における新たな領知宛行は確認できない。それは、この時期、清須会議以来秀吉とも親密な関係にある池田氏が美濃の中心勢力として存しており、敵対勢力であった高木氏に対して、新たな領知宛行がおこなわれたとは考え難い。

③ 関東流転 — 加藤光泰・そして徳川家康傘下へ —

この後の高木氏は、織田信雄の没落とともに一族で美濃の地を離れ、美濃多芸郡橋爪出身で大垣城主も歴任し旧知の間と考えられる甲斐の加藤光泰に仕えた。

加藤光泰高木党領知目録

高木党領知之事

貳千五百俵 高木彦六

此内にて、

五百五拾六表 彦左衛門隠居分二遣、

千九百四拾四表 高木勝兵衛

千九百四拾四表 高木次郎兵衛

千九百四拾四表 高木藤兵衛

合八千参百卅貳表

天正十九 十一月十二日 （加藤光泰 黒印）

この史料からも、加藤光泰は、高木党としてその一族を受け入れていることがわかる。
（東京大学史料編纂所蔵影写本、『上石津町史』所収）

貞友（藤兵衛・のち東家初代）は文禄の役にも従い戦果をあげた（『寛政譜』）が、文禄二年（1593）八月文禄の役からの撤兵途中、光泰が西平浦で病死した。そのため同四年（1595）高木貞利が家康に仕えたことを皮切りに、慶長二年（1597）までに一族は揃って、徳川家康に仕えた。それぞれの石高・封地等は次の（史料C・D）の通り。

（史料C）

渡申御知行書立事

一 貳百壹石七斗九升八合 しゃうし谷之郷

一 五拾四石五斗八升九合 さうきうの郷

（中略）

一 七拾六石八斗貳升三合 ミノハの郷之内佐木村之内

合千石

右、如此、為御知行渡置之間、可有御所務候、仍如件

文禄四年末ノ八月朔日 彦坂小刑部（元正）

高木権右衛門尉殿

大久保十兵衛（長安）（花押）
伊奈熊蔵（忠次）（花押）

（東京大学史料編纂所蔵、『上石津町史』所収）

（史料D）

（包紙ウハ書）

「慶長三戌年、三屋敷先祖四人知行方渡り候節之書付巻通」

覚

一 五百石 高木庄兵衛（貞秀）
一 五百石 高木次郎兵衛（貞俊）
一 五百石 高木藤兵衛（貞友）
一 五百石 高木彦六（貞盛）
右分、御知行方、御前にて御落着之間、其御心得可被成候、以上

（慶長三年）戌二月七日

伊熊（伊奈忠次）（花押）
大十兵衛（大久保長安）（花押）
長七左（長谷川長蔵）（花押）
彦小刑（彦坂元正）（花押）

高筑

（東京大学史料編纂所蔵、『上石津町史』所収）

徳川氏に仕えた高木一族の石高ならびに給地をまとめると次のとおりである。

文禄4年

貞利権右衛門 西家初代 1000石（上総天羽・周准郡）

慶長2年 同3年

貞盛平兵衛 西家2代 300石（上総望陀郡）500石

慶長2年 同3年

貞俊彦左衛門尉 北家初代 60余石（上総望陀郡）500石（武蔵荏原郡・相模鎌倉郡）

慶長2年 同3年

貞友藤兵衛 東家初代 60余石（上総望陀郡）500石（武蔵荏原郡）

（『寛政譜』並びに（史料C）・（史料D）から作成）

高木一族は、家康の家来として関ヶ原の合戦を迎えることとなる。関ヶ原合戦においては、小山評定直後、尾張・美濃の「按内者」として、本多・井伊の徳川軍先鋒に付けられ、故地駒野を拠点として、多芸口の焼払や駒野城の摂取に活躍した¹¹。戦後軍功により美濃石津郡時、多良郷のうち貞利（貞久の次男・西家）が二千三百石、貞友（貞久の五男・東家）、貞俊（貞久養子（長男貞家の子）・北家）が各々千石を拝領し、都合四千三百石の石高をもち個別に領主権を形成した。加増高は、西家が八百石、東・北家が各々五百石であった。

④もう一つの高木氏 — 関ヶ原合戦と美濃 —

関ヶ原合戦に先立ち、美濃の地は東西両軍が激突する戦場と化した。著名なものとしては東軍先鋒隊池田輝政らと織田秀信軍との間でおこなわれた、米野の戦いや岐阜城の戦いがあげられるが、それ以外にも西南濃各地で激しい戦いが繰り広げられた（文末図参照）。その中で、注目されることとして、高木を称する一族が、西軍として戦いに加わっていたことがあげられる。高須城は、高木盛兼（十郎左衛門）津屋城は高木正家（八郎左衛門）が西軍として参戦していたと伝えられる¹²。

本稿で主題とした高木氏が、織田信雄の没落と軌を一にして美濃を退転し、甲斐の加藤氏を経て徳川氏の傘下に入り、関東で給地を得る一方、故地の美濃には高木を称する一族がその跡を治めていた。両者の関係について明確ではないが、高木氏と同名の一族の中で豊臣政権との親疎により立場が違ってきたものと考えられる。その結果、両高木氏は、関ヶ原合戦を巡って、東西両軍に分かれ戦うこととなる¹³。こうしたケースとしては、信州真田氏の例が著名であるが、地域の類例としては福東城主丸毛氏が

挙げられる。

丸毛長照は西濃の国人領主として斎藤氏に仕えたが、織田信長の美濃侵攻とともにその旗下に入った。その後豊臣政権下において、子の丸毛兼利が、福東城主（二万石）とされた。しかし、天正年間豊臣氏が全国統一を目指す過程で、弟利勝・その子利久は、徳川家康に仕えた。利勝は家康の関東移封に従い御幕奉行を務めた後に致仕し、御廩米二〇〇俵を給されている。その子利久は、天正一六年段階で家康傘下に入り、知行四〇〇石（相模高座郡・武蔵榛澤郡）、後に秀忠養女（池田輝政女）が伊達忠宗に嫁すにあたり別に千石を与えられ（旧知四〇〇石は息利政が相続）附属されている。豊臣政権末期の混乱の中での分流ではないが、高木氏共々一族を存続し得たという点で興味深い事例である。

関ヶ原合戦において、美濃の諸將は否応なく旗幟を鮮明にすることを求められた。美濃の地は、東西の両勢力が激突する難しい場所であったが、高木氏・丸毛氏がおかれた状況を確認すると、何れも木曾三川、とりわけ長良川・揖斐川に挟まれたデルタ地帯を拠点にしていたことがわかる（P12地図）。

東西両軍の動きを確認すると、八月十四日池田輝政・福島正則らの東軍の先鋒隊は、清洲に集結、二十二日木曾川の渡河戦を経て、米野の戦い・竹ヶ鼻城の戦い、二十三日岐阜城合戦と美濃方面での諸戦に勝利を収めた。一方西軍の主力毛利秀元らは、近江から伊勢に侵攻し、八月二十日から二十四日で安濃津城を攻略後、西南濃から美濃を北上し、九月十日頃には南宮山に集結する姿勢をとっていた。

このように、東西両軍が激突する最前線に身を置く美濃の小勢力のうち、東軍に与した諸勢力（徳永・市橋）や、一旦は西軍に与したものの早い段階で徳川氏に通じた一族（加藤・竹中）が、結果として、江戸時代中小の大名や旗本として家を存続し得たのであった。

結語

それでは、織豊期における西美濃・高木氏の姿勢についてまとめたい。第一に、織田信長の美濃攻略以降、織田家と深い関係を保った。その関りは、本能寺

の変後も続き、美濃を治めた織田信孝に従い、その没落後は、美濃に直接支配権のない織田信雄との関りを深めた。

第二に、小牧長久手の合戦においては、織田信雄に与した。その結果、今尾城の支配等美濃における勢力の多くを失ったが、信雄の被護下、北伊勢の地で所領を得た。

第三に、秀吉の勢力拡大に対しては一貫して距離を置く姿勢を示している。秀吉が、このことは、幕府の編纂物である『寛政重修諸家譜』にとどまらず、一次史料としての「高木家文書」からも確認することができる。

第四に、徳川家康との関係については、本能寺の変前後といった割と早い段階から築いている。本稿ではこの関りが、秀吉の不興を買った可能性を指摘した。この関係は、織田信雄の傘下に入り、小牧長久手の合戦を戦ったことを通じてより深まった。加藤光泰の死後、徳川氏の傘下に入ることができたのもこうした関りが生かされたものと考えられる。

第五に、信長・秀吉・家康何れもが高木氏を自らの陣営に組み込むべく働きかけをしている。これは、高木氏が支配した揖斐川下流のデルタ地帯が、肥沃な土地であることに加え、交通（戦略）上の要地であることを看過することはできない。封地を替えたものの江戸時代高木氏が果たした「交代寄合」としての位置づけは、こうした歴史の上に成り立ったことが確認できる。

第六に、関ヶ原合戦に臨み美濃の諸將は、厳しい対応を求められた。その中で、高木氏は徳川氏との関りを深めることで故地美濃に返り咲くことができた。しかし、高木氏・丸毛氏などは結果として旗幟を二つに分けた可能性を指摘した。理由としては、豊臣政権との親疎、バランス感覚などが考えられよう。

1 「高木家文書」（個人蔵・歴史資料館寄託）については、寶月圭吾他編

（一九六四）『岐阜県史』史料編古代中世4、丸山幸太郎（二〇〇六）『織田信長と岐阜』（岐阜県歴史資料館発行）、山田昭彦（二〇一五）『天下人の時代』

図録（岐阜県博物館発行）がある。

- 2 三輪豊編（一九七五）「高木系譜」（『上石津町史料編』所収）
- 3 高木氏の系譜については、日置弥三郎編（一九六八）『岐阜県史通史編近世上』、秋山晶則「交代寄合美濃高木家の歴史的位置」（二〇一四）『大垣市埋蔵文化財報告書第23集 岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡 測量調査・発掘調査報告書』所収
- 4 斎藤高政義龍安堵状（『岐阜県史』史料編古代中世4、一九六九）
- 5 『寛政重修諸家譜』によれば、高木貞久の子貞利は、天正三年五月「長篠の役に右府にしたがひ、氏家常陸介入道卜全が組に属して高名ありしかば、右府その軍功を賞せらる。」との記述がある。同書編纂過程で、江戸時代の記述については、「記載内容を他家へ照会するなど正確さが求められるが、江戸時代より前の記述については、それぞれの家譜に頼った（平野仁也二〇一五）『寛政重修家譜』の呈譜と幕府の編纂姿勢」（『日本歴史』803号）と考えられ、個別検討が必要である。
- 6 福田千鶴（二〇〇五）『江戸時代の武家社会：公儀・鷹場・史料論』
- 7 跡部信編（二〇一四）『乱世からの手紙 ―大阪城天守閣取蔵古文書選―』図録（大阪城天守閣発行）
- 8 天正十年六月、秀吉は十八日近江在陣（『多門院日記』。二十三日ころ美濃在（同日付美濃立政寺宛秀吉禁制「立政寺文書」）とされる。（藤井讓治編（二〇一）『織豊期主要人物居所集成』）
- 9 尾下成敏（二〇〇六）「清須会議後の政治過程」（『愛知県史研究』10）所収）
- 中野 等（二〇一四）「豊臣政権論」（『岩波講座日本歴史10近世1』）
- 10 この文書については、家康が軍事的に協力を得るべき高木氏に宛てた文書としては、宛所の位置が特段低いため検討の必要がある。
- 11 『寛政重修諸家譜』
- 12 岐阜県教育委員会（二〇〇二）『岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第1集（西濃地区・本巣郡）』
- 13 その他、関ヶ原合戦にともない、一族が二分された美濃国内の例としては、加茂

郡内での遠藤氏の動きがあげられる。（西軍 遠藤胤直・大地城、／東軍 遠藤慶隆・小原城）／出典『美濃明細記』

濃州関ヶ原合戦 (慶長5年8月~9月)



美濃(三野)国(郡)の初見について

The First Appearances of the counties of Mino Province

近藤大典¹

Daisuke Kondo

¹ 岐阜県博物館

要旨

美濃国が所管する郡の成立については、昭和四十六年刊行の『岐阜県史 通史編 古代』(野村ほか, 1971)において初見史料が整理され、建郡時期の明らかかな石津・池田・席田・群上の四郡を除く、多芸以下の十四郡について「八世紀初頭の段階で、ここにあげたすべての郡が存立したと断言はできないにしても、そのほとんどが成立していたとみて、誤りないのではなからうか。」とされている。『岐阜県史』刊行後、木簡の出土数が増加し、とくに七世紀後半の評制下の状況をより詳しくみるこ
とができるようになりつつある。今回、その木簡を加え、あらためて美濃国所管の郡(評)の初見史料を整理し、不破・大野・厚見・各務・山県・武義・賀茂・可児の八評が、『岐阜県史』時点より初見がさかのぼることを確認した。

はじめに

『岐阜県史 通史編 古代』(以下、『県史』と略称する。)は、昭和四十六年(一九七二)三月に刊行されてから四十年以上経つが、現在でも県の歴史をひもとくうえでの基礎文献である。ここで取り上げる美濃国(郡)については、「第三章 律令体制の完成と上昇、第三節 濃飛両国の諸郡と郡司、一 濃飛両国の諸郡」(野村ほか1971)に記述がある。ここでは、美濃国所管の郡、『延喜式』では多芸以下十八郡あるが、そのうち奈良時代以降に建てられたことが明らかかな四郡を除く十四郡について、古文書・古文獻を中心に当時最新の史料であった木簡もまじえ、初見が整理されている。そして、大宝令制下における郡の前身である七世紀後半の評段

階の状況も踏まえて、「八世紀初頭の段階で、ここにあげたすべての郡が存立したと断言はできないにしても、そのほとんどが成立していたとみて、誤りないのではなからうか。」とまとめられている。

その結論について変更はないが、『県史』刊行後、七世紀後半の評制下の木簡が、奈良県高市郡明日香村の飛鳥池工房遺跡や石神遺跡をはじめとした飛鳥・藤原地域において相次いで出土し、当時に比べ関係史料が増加した。また、例えば奈良文化財研究所によって、評制下の荷札木簡が集成される(奈文研, 2006)など、質・量ともに増加した木簡を利用し、もともと史料の少ない地方の古代史をあらためて検討する環境が整いつつあるといえる。一方、評制下の木簡をもとに、律令国家形成期における地方制度の理解についても研究が深められている(市, 2010)。そこで、それらの成果に基づき、現時点(平成二十九年[2017]一月)における美濃国(郡)の初見をあらためて整理したいと思う。

なお、国(郡)の地名表記については、評制下と奈良時代以降、『延喜式』とは相違する場合がある。美濃の国名表記は、評制下を中心とした「三野」以降、「御野」↓「美濃」と変遷したことがわかつている。本稿では、煩雑ではあるが、原則として「美濃」で記述し、史料引用の際はその表記にしたがう。また、郡(評)名についても、『延喜式』の表記は、和銅六年(七一二)の好字令以降に整えられたものも含むと考えられ、それ以前、とくに評制下とは相違する例が多く、郡によっては複数の表記がある場合もある。そのため、これも本稿では、原則として『延喜式』の表記で記述し、史料引用の際はその表記に従う。

一 美濃国所管の郡

美濃国所管の郡については、『延喜式』民部上諸国条に次のようにある。

美濃国上管 多芸 石津 不破 安八 池田 大野 本巢 席田 方巢

厚見 各務 山県 武義 群上 賀茂 可児 土岐 惠奈

多芸以下十八郡あり、これは『和名類聚抄』でも同様である。このうち、石津・池田・席田・群上については建郡が奈良時代以降である。以下、建郡の順にみていく。

席田郡は、和銅八年(七二五)に本巢郡を割いて建てられた(『続日本紀』(以下、

『統紀』と略称する。」靈龜元年七月丙午条)。

池田郡は、『県史』では『続日本後紀』嘉祥二年(八四九)七月癸酉条を初見とし、その建郡時期を「九世紀半ば前」と推測することも可能であるが、条里遺構の検討からすると、八世紀初めの和銅・養老ごろとみる推測も可能」としている。しかし、その後、名古屋博物館所蔵『和名類聚抄』の「承和四年割安八郡池田郡」(名古屋博物館、1992)とする記述が明らかとなり、その建郡が承和四年(八三七)であることがわかった。

石津郡、群上郡については、斉衡二年(八五五)にそれぞれ多芸郡、武義郡を割いて建てられている(『日本文徳天皇実録』斉衡二年閏四月丁酉条)。

これら席田・池田・石津・群上の四郡を除き、大宝令施行時、あるいは、それ以前に立郡(評)がさかのぼる可能性があるのは十四郡で、その時期以前に廃止された未知の郡(評)の存在も考慮すると十四郡+αとなる。

二 各郡(評)の初見

十四郡各個にあらためて初見を整理していきたい。

①多芸

『県史』では和銅二年(七〇九)十月二十五日付の「弘福寺田畠流記帳」を初見としている。しかし、『県史』が落としたのか、新史料ではないが『統紀』大宝二年(七〇二)三月庚寅条に「美濃国多伎郡」とみえるので、こちらが初見であり、この箇所の『県史』は修正の必要があると考えられる。

②不破

『県史』では『統紀』大宝二年(七〇二)十一月庚辰条を確実な初見とするが、次の乙酉年(六八五)の年紀がある木簡が発見され、天武朝に存在したことが明らかとなった。

石神遺跡出土木簡(奈文研、2006)

・乙酉年九月三野国不_口

・評新野見里人止支ツ 俵六斗

170・25・3 011 檜・板目

なお、『日本書紀』(以下、『書紀』と略称する。)天武天皇元年(六七二)六月丁亥条には「入不破。比及郡家」とあり、不破郡(当時は評)の存在を前提にした記述で、これを初見とすることもできるが、『県史』は壬申の乱後に不破郡が多芸郡の北部を割いて立てられたとする見解があることを考慮し、大宝二年の記事を「確実な初見」としている。木簡により、乙酉年(六八五)には存在していたことが明らかとなり、その立評は、壬申の乱後であれば、六七二ないし六七三年から六八五年までの間と絞り込むことができるようになった。ただし、壬申の乱以前の立評の可能性も残っている。

③安八

『書紀』天武天皇元年六月壬午条の「安八磨郡」が『県史』時点の初見で、現在でもそれをさかのぼる史料は確認されていない。ただし、七世紀第4四半期に属するとされる「三野国安八麻評」(奈文研、2006)と記された木簡が飛鳥京跡苑池から出土しており、評制下での実在が裏付けられている。

④大野

『県史』では『統紀』大宝二年七月乙亥条を初見とする。美濃国関係の評制下の木簡は、他国に比較しても出土数が多いとされるが、その中でもとくに大野に關係したもの出土が相次いだ。年紀のわかる木簡で最も古いものは、石神遺跡出土の庚辰年(六八〇)の荷札木簡(奈文研、2006)で、それにより大野は天武朝にさかのぼって実在が確認できた。

〔庚乙〕

・□辰年 三野大野□
大□五十戸

〔田カ〕

・□部稻耳六斗〔□□〕
〔□□〕

169・30・6 033 檜・板目

また、飛鳥池工房遺跡から次の木簡が出土している。

・丁丑年十_口

〔和太カ〕

・伊□□□

(47)・(10)・4 081 檜・板目

奈文研(2006)では、この木簡は美濃国からの荷札の可能性が高いと考え、そ

の場合、大野郡石太郷にあたりと推定されている。これに従うと、大野は丁丑年（六七七）に存在したとみることが出来る。

なお、裏面の「部」は、実際の本簡ではカタカナの「ア」のように記されているが、これは「部」のおおざとを用いた略字である。本稿では、便宜上、正字の「部」で示している。以下、⑦厚見、⑧各務、⑩武義、⑪賀茂、⑫可兒、⑬土岐で引用した本簡も同様である。

⑤本巢

『県史』では大宝二年御野国本巢郡栗栖太里戸籍を初見とする。『県史』以降、藤原宮跡から「本須郡」（奈文研、1978）と記した本簡が報告されている。藤原宮からの出土であるが、郡制下のものなので大宝以降で、現時点で初見は変わらない。

⑥方県

『県史』では大宝二年御野国肩県郡肩々里戸籍を初見とする。『県史』以降、平城宮跡から「□□〔方県カ〕郡」（奈文研、1981）と記された和銅四年（七一）の年紀をもつ本簡が出土しているが、現時点で初見は変わらない。

⑦厚見

『県史』では天平勝宝二年（七五〇）四月二十二日の美濃国司解を初見とするが、その後、評制下の荷札本簡が出土している。

石神遺跡出土本簡（奈文研、2006）

〔三カ〕

・□野国厚見評草田五十戸

〔田カ〕

・□□部支田□□米五

〔赤カ〕

（145）・22・5 039 檜・柎目

この本簡に年紀は記されていないが、「五十戸」とあることから、五十戸を里と表記する前の天武朝以前の木簡といえる（市、2010）。厚見は、初見が大幅にさかのぼった一例である。

⑧各務

『県史』では大宝二年御野国各牟郡中里戸籍を初見とするが、次の本簡によって評制下の己亥年（六九九）に存在したことが確認された。

藤原宮跡出土本簡（奈文研、2006）

・己亥年九月三野国各□□〔牟カ〕

・汗奴麻里五百木部加西倭

（163）・24・4 019 檜・柎目

⑨山県

『県史』では大宝二年御野国山方郡三井田里戸籍を初見とするが、次の本簡によって丙申年（六九六）に存在したことが確認された。

藤原宮跡出土本簡（奈文研、2006）

〔丙申年乙〕

・□□□七月三野□山方評

〔国カ〕

・大桑里□安□藍一石

185・23・4 031 檜・柎目

⑩武義

『県史』では霊龜三年（七一七）の元正天皇美濃行幸に関わる記事に「務義郡」（『統紀』養老元年九月戊午条）とあるのを初見としたが、次の本簡によって、天智朝の乙丑年（六六五）に存在したことが確認された（以下、便宜上、この本簡を乙丑年本簡と仮称する。）。

石神遺跡出土本簡（奈文研、2006）

・乙丑年十二月三野国ム下評

・大山五十戸造ム下部知ツ

従人田部兒安

152・29・4 032 檜・柎目

「ム」はカタカナのムのようであるが、大宝二年御野国加毛郡半布里戸籍や酒船石遺跡出土本簡の七世紀後半から八世紀初頭頃の溝から出土した本簡の「牟義君」（明日香村教育委員会、2006）などにみえる「牟」の略字と考えられる。

この本簡は、現在のところ、国一評—五十戸の地方行政制度をうかがうことが出来る最古の本簡であること、部民制とは無関係な五十戸が編成されていることなど、その評価が律令国家の形成史を考える上で大きな意味をもつ本簡として、大変重要な史料となっている。乙丑年本簡は、そのような全国におよぶ評価とは別に、武義郡の歴史を考える上で大きな意味をもっている。以下、本稿の趣旨とはやや離れるが、この本簡を題材に武義郡の歴史に関わって一点述べておきたい。

「大山五十戸」は、後の武義郡大山郷（『和名類聚抄』）にあたりと考えられる。



図 武義郡大山郷・揖可郷比定地

※この地図は、国土地理院発行の5万分1地形図（岐阜・関・金山・美濃加茂）を使用したものである。

※各郷は、現在の地名を残存地名ととらえ、おもに『岐阜県の地名』（日本歴史地名体系 21, 平凡社, 1989）を参照して示した。

※大山神社は、現社地が『延喜式』までさかのぼるかは不明。

大山郷の地は、地名がみえる賀茂郡富加町大山に比定されている。なお、東側の美濃加茂市伊深町には武義郡揖可郷が、川浦川を挟んで南側の賀茂郡富加町羽生には賀茂郡植生郷（大宝二年戸籍では加毛郡半布里）が比定されている。この大山里（郷）については、その比定地が現在も賀茂郡富加町に所属しているように、武義郡と賀茂郡が接する位置にある。また、大山郷と関係が深いと考えられる大山神社が『延喜式』で賀茂郡に記載されていることから、武義郡と賀茂郡の間での大山郷の帰属問題については以前より注目されていた（例えば阿部, 1923・式内社研究会, 1986など）。近年では、『新修関市史』（河合ほか, 1996）が、武義・賀茂両郡の郡界は流動的であったとし、大山に隣接する揖可と合わせ、成立と変遷の過程を詳細に推測してい

る。さて、乙丑年木簡の出現により、大山里（郷）及び揖可里（郷）の成立、帰属する郡の問題などについて、あらためて検討する必要があるのではないかと考える。

『新修関市史』における大山里（郷）の成立と変遷に関する推測は以下のようである。成立については、揖可・大山の比定地における条里水田の班給面積が一つの里を設定するには狭すぎることから、加毛郡半布里と併存していた可能性は薄く、一方、加毛郡半布里の班給面積の不足という事態とあわせ、伊深の条里水田は「半布里の人々への班給にあてられたとみるほうが合理的」とし、伊深および大山は「大宝二年の段階では半布里に、ということとは加毛郡に含まれていたと考えるほうが自然であろう。その後、人口の増加や耕地の拡大などにより一郷が設定されたのであろう」とされている。また、後述する郷里制下の木簡Aをもとに揖可郷がその時点で確実に存在したことに触れつつ、天平勝宝二年四月二十二日美濃国司解に「武義郡揖可郷」がみえることと『和名類聚抄』で大山郷が武義郡に属することから、「八世紀初めには賀茂郡に属していた両郷が、後に武義郡に編入されたことになる」とされる。そして最後に、大山郷を武義郡に記載する『和名類聚抄』の郷名が九世紀前半の状態と最もよく一致するとする池邊彌（『和名類聚抄郡里驛名考證』）の説を受け、『延喜式』の神名帳には、大山郷にあったと思われる大山神社が載せられているが、その所在地は賀茂郡とある。九世紀前半には確実に武義郡に属していた大山郷が、こんどは一〇世紀初めには賀茂郡に属していたのである」とされている。

十世紀の状況については、ここでは触れない。一方、両郷の成立についての推測に関しては、乙丑年木簡の出現が再考を迫るものとなったと考える。木簡によって六六五年時点で、後の「武義郡大山郷」にあたる「ム下評大山五十戸」が存在したことが明らかとなった。少なくとも大山は、大宝二年時点の条里水田の班給面積の問題とは無関係に、五十戸として成立していたと捉えることができ、『新修関市史』が指摘するその問題は成立を考える上での根拠にならないといえるのではないか。

次に所屬郡についてである。大山についてはすでに評制下において「ム下評」、後の武義郡に属しており、また成立の根拠が揺らいだすると、賀茂郡から武義郡に所屬がかわることを想定する必要をあまり感じない。今後、八世紀代の大山里（郷）に関する木簡の出土が期待されるところである。

一方、揖可郷については、天平勝宝二年に武義郡に属していたことは明らかであるが、それに加え、以下の注目すべき二点の木簡がある。

A 平城宮跡出土木簡（奈文研、1987）

揖可郷高倉里山下部荒□□□ (200) × (16) × 4 039

B 平城京二条大路条間路出土木簡（奈文研、1998）

〔武義郡カ〕
□□□□□□郷高□里□

・ 亀元年 (145) ・ (10) ・ 3 081

『新修関市史』でも触れられているように、Aによって所属郡が不明ながら、郷里制下（七一七～七三九末・七四〇初頭）には「揖可郷」が存在したことが確定である。Bも同じ郷里制下の木簡である。残念ながら郡郷名が明瞭でないが、郡名は「武義郡」と読めるのではないかとされている（現物は確認していないが、奈良文化財研究所が公開している木簡データベースに掲載された写真を見る限り「武義」でよいと思われる。）。ここで注目されるのは、「高□〔倉カ〕」とされている木簡Bの里名である。高倉里であれば、Aを参考に揖可郷高倉里にあたる可能性があり、郡名が武義郡とすると、郷里制下の遅くとも神亀元年（七二四）には武義郡に揖可郷が存在したとみられることも可能になる。「八世紀初めには賀茂郡に属していた」が、「後に武義郡に編入されることになる」（河合ほか、1996）との推測は、大山と同じくそれほど短期間に所属郡を変更する必要があったのか疑問である。現時点で明確な証拠はないが、『新修関市史』の揖可郷に関する成立から所属郡の変更に關する推測についても大山郷と同様にやはり疑問であるといわざるを得ないのではないか。

以上、大山里（郷）・揖可里（郷）の成立と『和名類聚抄』までの動きを推測する『新修関市史』について、おもに乙丑年木簡を材料に疑問を呈した。基本的には、成立から少なくとも九世紀代頃までは両郷とも武義郡に属していたとみてよいと考える。

⑪賀茂

『県史』時点では大宝二年御野国加毛郡平布里戸籍を初見としたが、次の戊子年（六八八）の年紀をもつ木簡から評制下の存在が確認された。

飛鳥京跡苑池出土木簡（奈文研、2006）

・ 戊子年四月三野国加毛評
・ 度里石部加奈見六斗

181・22・5 011 檜・板目

なお、石神遺跡出土の辛巳年（六八一）の年紀をもつ木簡に「可毛評」（奈文研、2003）とみえるが、周辺から美濃国に關わる木簡が多数出土していることから、これも美濃国の「可毛評」の可能性が高いとされている。その場合、戊子年をさらにさかのぼって存在が確認できることになる。

⑫可児

『県史』時点では天平勝宝二年の美濃国司解を初見とするが、飛鳥池工房遺跡から丁丑年（六七七）の年紀をもつ木簡が出土し、その存在が大幅にさかのぼって確認できた。

飛鳥池工房遺跡出土木簡（奈文研、2006）

丁丑年十二月次米三野国 加尔評久々利五十戸人
物部古麻里

146・31・4 031 檜・板目

⑬土岐

『書紀』天武天皇五年（六七六）四月己未条が初見である。飛鳥池工房遺跡から丁丑年（六七七）の年紀をもつ木簡が出土し、評制下における存在が裏付けられた。

飛鳥池工房遺跡出土木簡（奈文研、2006）

・ 丁丑年十二月三野国刀支評次米

・ 惠奈五十戸造阿利麻
春人服部枚布五斗俵

151・28・4 032 檜・板目

⑭惠奈

『県史』は、天平勝宝二年の美濃国司解を初見とするが八世紀初めには存在したとみている。⑬土岐で引用した飛鳥池工房遺跡から出土した木簡の「刀支評惠奈五十戸」の記載により、惠奈は「刀支評」の五十戸の一つであったこと新たに判明し、丁丑年（六七七）には評として成立していなかったことが明らかとなった。現時点で、惠奈郡の初見は『県史』と変わっておらず、丁丑年以降、天平勝宝二年までの間に土岐郡（評）を割いて成立したと考えられる、としか言えない状況である。

以上、『延喜式』における美濃国所管で、評制下から大宝令施行前後に存在したと考えられる郡(評)の初見を整理した。なお、①～④以外に明確に美濃国が所管すると考えられる未知の評に関する史料は、現時点で確認できない。

おわりに

以上のように、『県史』以降、数を増した七世後半、評制下の木簡により、『県史』より初見がさかのぼったのは、不破・大野・厚見・各務・山県・武義・賀茂・可児の八評である。

美濃国所管の評は、この八評に加え、『書紀』に初見があり木簡も出土している安八と土岐を合わせると、現時点で十評の存在を確認することができる。

八世紀初頭に存在が確認できる多芸・本巢・方県については評制下にさかのぼるのか、また丁丑年(六七七)に「刀支評」の五十戸でその後どの時点で建てられたか不明な恵奈については立郡(評)時期を推定する手がかりが、そして、それぞれの評がどこまでさかのぼるのか、それらもうかがう木簡の出土が今後、期待される。

冒頭にも述べたが、四十年以上に編まれた『県史』における七世紀末から八世紀初頭の美濃国が所管する郡(評)の成立についての理解に関しては、とくに変更はなく、あらためて『県史』の見通しの正確さを認識できた。しかし、一方で、その後に出土した木簡により、評制下での状況が明らかになりつつある。発掘調査による出土という偶然性に左右されるが、今後も飛鳥・藤原地域、そして県下での木簡の出土に注視しつつ、蓄積された史料をもとにほんの一部でも『県史』時点より岐阜県の歴史の理解を進めることが出来ればと思う。

引用文献

- 阿部榮之助編、1923、濃飛兩國通史、岐阜県教育会、岐阜、230・329-330
 明日香村教育委員会、2006、酒船石遺跡発掘調査報告書、奈良、127
 野村忠夫ほか、1971、岐阜県史 通史編 古代、岐阜県、岐阜、242-245、引用箇所は野村忠夫執筆
 市大樹、2010、飛鳥藤原木簡の研究、塙書房、東京

- 池邊彌、1981、和名類聚抄郡郷里驛名考證、株式会社吉川弘文館、東京、20-21・425-439
 河合政治ほか、1996、新修関市史 通史編 自然・原始・古代・中世、関市教育委員会、岐阜、556-560、引用箇所は長瀬仁執筆
 名古屋博物館、1992、和名類聚抄、愛知、名古屋博物館資料叢書141ウ
 独立行政法人文化財研究所、奈良文化財研究所、2006、評制下荷札木簡集成、奈良、47-52 ※本文中では奈文研と略称する
 奈良国立文化財研究所、1981、平城宮木簡三、奈良、145
 奈良国立文化財研究所、1987、平城宮発掘調査出土木簡概報十九、奈良、22
 奈良文化財研究所、2003、飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報十七、奈良、17
 奈良国立文化財研究所、1998、平城宮発掘調査出土木簡概報三十四、奈良、31
 奈良県教育委員会、1969、藤原宮―国道一六九号線バイパスに伴う宮域調査の成果、奈良
 式内社研究会、1986、式内社調査報告第十三卷東山道2、皇學館大學出版部、三重、143-148

岐阜県博物館調査研究報告 第37号

平成29年3月31日 発行

編集・発行 岐阜県博物館
関市小屋名1989 (岐阜県百年公園内)
TEL 0575-28-3111

印刷 株式会社 愛和印刷